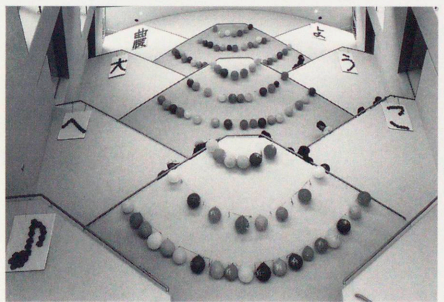


ふ
じ
み
の

分室
東京農業大学図書館
07.4.16
雑誌受入
厚木



No.43
東京農大畜友会



巻頭言

畜産学科長 渡邊 忠 男

畜友会の機関誌「ふじみの」第43巻の発刊に当たり、ご挨拶を申し上げます。

本誌の発刊は、現在はその年の卒業時に卒業生に配布するとともに次年度の入学生に配布できるように考慮して、3月に発刊するように成っているようです。

まずは、この3月21日に卒業される平成18年度の卒業生の皆さんが大学での勉学を終えられて無事卒業されることに心よりお祝いを申し上げます。

皆さんは是までいろいろな面で支えて頂いた多くの人たちに対する感謝の気持ちを忘れずに、健康に十分留意されて新しい環境の中で、農大の畜産学科においては是までの間に蓄えたそれぞれの力を大いに活用して頑張ってください。

在校生の皆さんは、是まで畜産学科で過ごしてきた時間をじっくりと振り返り、将来に向けた目標作りを進めて各自が卒業するとき後悔のないように頑張ってください。

そして4月より東京農産大学農学部畜産学科の新たなメンバーとして入学される新入生の諸君には心よ

りお祝いを申し上げるとともに歓迎致します。皆さんは大学生としての自覚を持って畜産学科の一員として、色々な面で積極的に取り組むと共に多くの友達を作ることにより将来「農大の畜産学科に入学して本当に良かった」と思えるような有意義な学生生活が過ごせるように頑張ってください。

おわりに、本誌発刊に当たり、快くご寄稿頂きました方々並びに編集に携わった畜友会の役員諸氏や関係各位に心より感謝申し上げます。

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長

菜の花の香り漂い、桜の芽もほころぶ今日この頃、今年も「ふじみの」第四十三号を発刊することとなりました。

さて、本誌は畜産学科の先生方、学生達の原稿を記載するとともに昨年一年間の事業報告を記載しています。今年は、厚木キャンパスに移転し早くも六年が経ち、「厚木キャンパス」が地域に浸透し、より土台が形成され落ち着いてきた様に思います。今後もまだまだ変化しつつありますが、その中で学生一人一人が自ら感じた「夢」や「希望」、また「努力」や「不安」などの文章が載せられています。ぜひ、隅々まで御覧いただけたら幸いです。

ふじみの

目次

退職にあたり

西脇先生との思い出
退職にあたって

ラクロスサークル一同
井上 武

巻頭言

渡邊 忠男

ふじみの発刊にあたり

須藤 真史

同窓会だより

同窓会会長あいさつ

伊藤 澄磨

畜産振興会

東京農業大学畜産振興会 便り

渡邊 誠喜

研究室だより

- 家畜繁殖学研究室
- 家畜飼養学研究室
- 畜産物利用学研究室
- 家畜育種学研究室
- 家畜生理学研究室
- 家畜衛生学研究室
- 野生動物学研究室
- 家畜マネジメント研究室

集う学友

農大での4年間、仲間に感謝。
島民紀行
「子供っぽさ」を忘れない大人へ
大学生活、始めの一步

1年 安部 佑美
2年 遠藤 由美
3年 奥本 将彦
4年 金井 俊憲

ウガンダにおける野生動物の価値
袖振り合うも多生の縁
「就任の抱負と飼料米構想の実現に向けて」

安藤 元一
小川 博
信岡 誠治

畜友会だより

平成十八年度畜友会事業報告
平成十七年度畜友会決算報告
特別会計収支報告
平成十八年度畜友会予算
特別会計予算
平成十八年度畜友会役員

第七回厚木キャンパス収穫祭・
第一一五回体育祭事業報告及び結果報告
東京農業大学農学部畜産学科「畜友会」会則

第七回厚木キャンパス収穫祭・
第一一五回体育祭各部門委員長より

最期に・・・。

統一本部委員長 3年 須藤 真史

MAKE YOUR SMILE

特別企画委員長 3年 福山 裕史

目指せ「5万人!!」

宣伝隊長 3年 高野 大智

神輿

神輿隊長 3年 西岡 莊平

よき日々、思い出、仲間たち

体育祭委員長 3年 長壁 治弘

?みゆきちゃん?

槽裝飾委員長 3年 曾田由布子

畜統、永久にともに

裝飾委員長 3年 村松 剛

家畜苑委員長として

家畜苑委員長 3年 河合 大典

編集後記

3年 谷口 絵梨

同窓会だより



同窓会会長あいさつ

畜産学科同窓会

会長 伊藤 澄磨

昭和二十四年に設置された畜産学科は今年で五十八年の月日を経ることとなりました。これまでの間、昭和二十八年度の第一期卒業生以来、平成十八年度卒業生を含め延べ七、七五名の同窓生を世に送り出し、それぞれが国内、外を問わず畜産業ならびに関連産業において活躍されています。

本会は、昭和六十三年に畜産学科創立四十周年を迎えた折、会員相互の親睦を図ると共に畜産学科の発展に寄与することを目的に設立されました。以来、会員の皆様のご協力により下記のような事業を着々と展開しております。

一、畜産学科への援助

二、新入会員および卒業祝賀会への援助

三、会員名簿の追補版発行

四、同窓会報の発行

五、代議員会および親睦会の開催

六、役員会および常任幹事会の開催

昨年九月には、講演会と代議員会を同時に開催し、多くの卒業生と在学生に出席いただきました。講演会では「東京Xを事例とした食品の安全性とトレーサビリティについて」と「農場におけるHACCPの取組について」という内容でOBに講演をしていただきました。その後の懇親会にも多くの卒業生が参加し、長い時間教員、友人と談笑され満足されたことと思います。

本誌の発行は平成十八年度の卒業式当日と想います、卒業生諸氏はご卒業おめでとうございます。本日から同窓会会員とされる訳ですから、本学科で学ばれたことに胸を張り、そして共に過ごした仲間、先輩、後輩と生涯連絡を密に取り合いながら各界でご活躍戴きたいと思えます。そのケルンとして同窓会を活用下さい。

準会員である新入生を含めた在校生諸氏は、生涯の友、恩師に恵まれるよう本会を活用され、恩恵を受けていただくと共に文武両道の精神で勉学、課外活動に活躍され悔いのない学生生活を通じて幅広い人格を形成されますことを祈念いたします。

畜産振興会



東京農業大学畜産振興会 便り

東京農業大学畜産振興会

会長 渡邊 誠 喜

東京農業大学畜産振興会が発足して、早十六年が経ち本誌に便りを執筆する時期となりました。そこで「ふじみの」発行にあたり、本会の発足の経緯やこれまでに実施した事業について紹介させていただきます。

本会は東京農業大学農学部畜産学科及び大学院農学研究科畜産学専攻に所属する学生の教育・研究の向上に資するために、平成三年三月二十三日に学校法人東京農業大学の認可をえて設立されました。会の運営に遺漏なきよう学内外から本会の役員として理事、監事が選任され、理事会で必要事項が審議決定され、運営にあたっています。一方、役員以外の評議員によって評議員会を組織し、理事会での審議・決定内容について承認を得るこ

ととなっております。

具体的な事業内容としては、畜産振興会奨励学生としての採用が毎年二、四年次生の各学年から一名ずつ計三名、姉妹校留学生並びに渡米農業実習生への交通費の一部支給、優秀卒業論文賞を毎年一名、さらに関連学会誌に学術論文を掲載・発表した学生、または学会で口頭発表した学生に対する表彰を実施しております。近年、学生による論文発表や学会での口頭発表は年々増加し、会計担当理事も嬉しい悲鳴を上げるほどになり、益々本会の意義が高まってきております。また、社会の経済不況により納入学費の調達が難しい学生も増えており、これらの学生に授業料などの一時貸与も行っております。

平成九年四月にここ厚木キャンパスが開学し、畜産学科が移転しましたが、本年三月には厚木キャンパス育ちの第六期の学科学生ならびに第四期の大学院生（博士前期課程）が卒業いたします。移転から二年間は、教員が世田谷キャンパスにおり、厚木キャンパスは学生のみと云う状態でした。そこで本会では、学生への教材提供の意味から平成九年には乳用子牛雌一頭、同十年にはリヤマ雌一頭、雄一頭、そして同十一年には黒毛和種子牛一頭を寄贈いたしました。これらの家畜は目下、本学富士畜産農場に繋養されており、それぞれ実習・実験の材料として活用され、さらに厚木キャンパス収穫祭の家畜苑に参加し、学生はもとより周辺住民にも親しまれております。

また、これら諸事業の成果を取り纏めたものを平成十

年より毎年振興会会誌として発行しており、こちらも本年度で九号を数えるまでになりました。

本会設立の契機は振興会会誌創刊号に紹介されているように平成二年十二月一日、不慮の交通事故により残念にも尊い一命をなくされた江渡宗徳君（当時畜産学科二年在学中）のご両親から寄付を賜ったことによります。

設立後、逐次拡大してきた事業を遂行するための資産は、

- 一 東京農業大学畜産学科同窓会からの寄付金
- 二 賛助会員会費
- 三 一般寄付金
- 四 その他の収入

によって賄われておりますが、より一層の充実した事業展開のためには更なる原資が必要であります。

卒業生には本会の趣旨をご理解いただき、後輩学生の育成のため是非ご支援を賜りたくお願いいたします。

在学生諸君には本会の目的に叶う事象が生じた場合には本会を活用され、充実した学生生活を送られるよう祈念いたし、振興会便りいたします。

研究室だより

家畜繁殖学研究室

私たち家畜繁殖学研究室は、門司恭典教授をはじめ、桑山岳人教授、佐藤光夫講師、岩田尚孝講師のご指導のもと、大学院生7名4年生34名、3年生33名で構成され日々の研究に取り組んでいます。

当研究室では、家畜、家禽などの繁殖生理について研究しています。

具体的には、

- ・ 家畜の体外受精に関する研究
 - ・ 家禽における繁殖行動中のホルモンに関する研究
 - ・ 精子の凍結保存に関する研究
- などのテーマを定め、研究を進めています。最終目標は人間社会に対する有用価値を考慮に入れた家畜生産の技術として確立することです。日常の活動内容は、3年生は繁殖学の基本的な知識、実験方法や技術を身に付けるとともに、シバヤギ、ミニチュアブタ、家禽の日常の飼育管理を行い、大学院生や4年生の研究や実験の補助をしています。

年間の主な行事は、新入生歓迎会、年2回の納会、収穫祭への参加、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会などがあります。

室員同士とても仲が良く、活気に満ち溢れています。

先生方や大学院生ともに会話が多く、各々が自分自身の目標に向かって努力を重ねています。楽しい行事と研究を両立し、充実した研究生生活を送っています。

平成十八年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導員
秋山紗菜絵	ミニチュアブタにおける性成熟前の卵巢状態について (関東畜産学会発表)	桑山
浅野 満利	ミニチュアブタの妊娠期における糞中エストロンサルフェート濃度と産子との関係	桑山
新井 信元	黄体の形状とウシ卵巢中のプロゲステロン濃度との関係について (関東畜産学会発表)	岩田
伊藤 愛弓	去勢二ホンウズラに対する採血が血漿コルチコステロン濃度に及ぼす影響 (日本家禽学会発表)	桑山
上野 活樹	産業豚の妊娠期における糞中エストロンサルフェート濃度と産子数の関係	桑山
江藤 将仁	デュロック種の混合精液を用いた人工授精における繁殖成績について	門司

岡橋 勇太
ウシ成熟培地への糖類添加がその後の成
熟率や核相の変化に及ぼす影響
(関東畜産学会発表)

加藤 るい
精漿がブタ精子性状に及ぼす影響

金井 俊憲
黒毛和種における早期離乳が発情回帰に
及ぼす影響

金嶺 亨
凍結保存へのBSA(リノール酸)の添加が
ウシ凍結精液に及ぼす影響

川俣 真一
セイロン野鶏の戻し交配に関する研究

木岡 大佑
凍結保存液へのBSAおよび脂肪酸フリー
BSAの添加がウシ凍結精液に及ぼす影響

北蘭 大志
ニワトリ凍結精液の人工受精に関する研究

小林 邦郷
豚におけるボディコンディションスコア
と背脂肪厚が次回産子数に及ぼす影響

酒井美乃梨
グリーン・ツーリズムに取り組むNPOの展
開とその課題

坂口 陽祐
ウシ体外成熟培地への糖類添加が受精率
および性比に及ぼす影響
(関東畜産学会発表)

塚田 香菜
ブタ体外受精における受精培地へのD-
マンノース添加が多精子受精率に及ぼす
影響

島本 純子
岐阜地鶏の就巢行動に対する甲状腺ホル
モン阻害剤の影響

深沢真由美
凍結保存液へのBSAおよび脂肪酸フリー
BSAの添加がシバヤギ精液性状に及ぼす
影響

古川 智也
受精12日目におけるミニチュアブタ胚の
形状と性比の関係について
(関東畜産学会発表)

目時 友美
ブタ卵液が前胞状卵胞の発育に及ぼす
影響

伊藤 沙織
ミニチュアブタにおける夜間給餌による
昼間分娩誘起について

梅垣 隆矢
ミニチュアブタの妊娠期における血漿中
エストロンサルフェート濃度と産子数と
の関係

大出亜矢子
月齢がウシ胞状卵胞の体外発育に及ぼす
影響

坂本 愛弥
凍結保存液への不飽和脂肪非添加BSA及
びリノール酸BSAの添加がシバヤギ精液
性状に及ぼす影響

佐々木康仁
受精12日目におけるミニチュアブタ胚の
形状とエストロジオール産性能について
(関東畜産学会発表)

佐藤 功
乳牛における分娩前後のボディコンディ
ションスコアおよび尿素態窒素と回帰発
情との関係

清水慶一郎
ブタ卵子の体外成熟および受精に及ぼす
アセチル「カルニチン」の影響

関 綾乃
シバヤギへのウマ絨毛性腺刺激ホルモ
ン(eCG)投与が精液性状に及ぼす影響

園田 将晴
雄ニホンウズラに対する採血が血漿コル
チコステロンおよびテストステロン濃度
に及ぼす影響

高井 まき
シバヤギの妊娠期における栄養状態が新
生児の卵巣中原始卵胞数に及ぼす影響

高橋 喜子
シバヤギの哺乳期における栄養状態が子
畜の卵巣中原始卵胞数に及ぼす影響

高山 薫
PCR法によるブタ胚の雌雄判別方法の検討

修士論文

伊藤 麻里
ブタ卵液がブタ卵体外成熟に及ぼす影響
(日本養豚学会、日本胚移植研究会、
International embryo transfer society 発表)

北川 真美
卵胞膜細胞と顆粒層細胞との共培養がブタ卵子の
体外成熟およびその後の受精・発性能に及ぼす影響
(日本養豚学会、日本胚移植研究会、
International embryo transfer society 発表)

松原 薫
凍結方法の違いが牛体外受精胚の性比率に及ぼす
影響
(日本胚移植研究会、
International embryo transfer society 発表)

矢野 則維
雄ニホンウズラにおけるペアリング条件の違いが
クローアカ腺の発達に及ぼす影響
(日本家禽学会発表)

氏名 論文題目 指導員

我々人間に生産物を提供してくれる家畜。その形態や生活環境は違っても、どの家畜も生きていく上で欠かすことのできないのが飼料です。

本研究室では、家畜たちが如何なる物を、如何様に、如何程度食べているのか(与えたらよいのか)を常に研究しています。これらの妥当性を判断する知識として、各家畜の行動の意味やその排泄物、また地域社会に対する影響なども考えなくてはなりません。これらの知識を応用した学問が家畜飼養学です。

研究は、栗原良雄教授、祐森誠司教授、池田周平助教の指導のもと進めており、成果は日本畜産学会、日本養豚学会、日本家畜管理学会、日本ペット栄養学会等の大会に毎年発表されています。研究室の活動は、春の富士農場での専攻実習と新室員歓迎会に始まり、夏の家畜管理実習(学外)、飼料成分分析実験、秋の収穫祭への参加(模擬店牛・豚・鶏の串焼き、文化芸術展嫌われ肉骨粉の一生)、冬の畜産関連諸施設の見学を兼ねた研修旅行、卒業論文発表会、卒業生サヨナラパーティー、年二回の大掃除に納会と、盛り沢山です。

先生方の指導は時に厳しいこともありますが、学生の相談には親密に応じてくださり、厳しさの中にも優しさを感じます。また各行事を通じて室員同士の仲も深まり、楽しい大学生活を送っています。

庵屋敷瑛子 金華豚の成長と枝肉成績について 池田 祐森

飯塚 真也 富士農場において生産された黒毛和種子牛の体重に因与する要因について 栗原 佐藤

井戸川一磨 発光ダイオードの点灯時間の違いが採卵鶏の卵質に及ぼす影響 栗原 祐森

岩山 敬太 ウサギの飼料中CPが消化率に及ぼす影響 池田 祐森

海老原達之 金華豚胸最長筋の理化学的性状 池田 祐森

中村創一郎 木炭添加飼料給与が採卵鶏の糞中水分含量およびアンモニア揮散濃度に及ぼす影響 栗原 祐森

小椋 優司 迅速繊維定量装置の分析精度について 栗原 祐森

織田 知幸 ラットに給与する飼料と含水糞中のコバルトとビタミンB12との関係 池田 祐森

鎌木 雅人 運動後の軽種馬の尿成分について 池田 祐森

郡司 雅俊 軽種馬用水洗敷ワラの再利用について 池田 祐森

坂元 勝俊 豚糞尿の堆肥化促進について 池田 祐森

佐藤 秀直 雄豚飼料へのL-カルニチン添加が精液性状に及ぼす影響 池田 祐森

菅原 里美 木炭添加飼料給与が採卵鶏の飼料効率と産卵率に及ぼす影響 池田 祐森

鈴木 智子 ウサギの消化試験における新Index法の検討 栗原 祐森

関 岳彦 2006年度における富士農場草地の収量および養分収量について 栗原 祐藤

関 大樹 木炭添加飼料給与が採卵鶏の卵質に及ぼす影響 栗原 祐藤

竹澤 朋 糖を添加した豚糞尿から揮散するアンモニア濃度について 池田 祐森

土井 美里 母豚飼料へのL-カルニチン添加が母乳成分に及ぼす影響 池田 祐森

藤井 恵子 兎飼料へのファイターゼ添加が尿中ミネラルに及ぼす影響 池田 祐森

松岡 佑宣 馬房におけるアンモニア揮散濃度の測定 池田 祐森

溝口 友美 兎飼料へのファイターゼ添加が消化率に及ぼす影響 池田 祐森

尾崎 紘江 金華豚の窒素排泄量について 池田 祐森

山崎 崇 L-カルニチン添加飼料を摂取した母豚から産出された肉豚の成長に関する研究 池田 祐森

渡邊 円香 ハーブ香料の濃度の違いが乳牛の嗜好に及ぼす影響 池田 祐森

大友 誠 集約放牧の展開と経営的評価に関する考察―北海道東地方の草地酪農地帯の事例分析を通じて― 栗原 信岡

小坂 仁美 牛乳の消費減退の要因分析と消費拡大方策についての検討―大学生における牛乳の消費の実態および意識調査を軸として― 栗原 信岡

須田 洋史 肉牛における乾草へのい草粉末添加による嗜好性の向上 栗原 祐藤

渡壁重矢子 ハーブ香料種の違いが乳牛の嗜好に及ぼす影響 池田 祐森

山中 幸彦 発光ダイオードの点灯時間の違いが採卵鶏の産卵成績に及ぼす影響 池田 祐森

村松 仁 ウサギの飼料中のL-アスパルギン酸の動態 池田 祐森

村田 岳彦 軽種馬用水洗敷ワラの洗浄液の再利用について 池田 祐森

畜産物利用学研究室

本研究室は室長の松岡昭善教授をはじめ、渡邊乾二嘱託教授、古川徳教授のご指導のもと、大学院生2名、大学4年次生35名、3年次生34名で構成される室員が、それぞれ活発に日々の研究活動などに取り組んでいます。

具体的には、乳・肉・卵中に含まれる各成分の物理・化学的特質ならびに栄養・生理学的機能特性を品種、個体、分子レベルで追究することや、その研究成果を食品成分の機能性・保存性の改良、製品製造工程の改良や新しい加工法の開発などに応用するための研究を行なっています。

年間の主な活動としては、週一回行われるゼミナールの他、夏休みを利用しておこなう世田谷キャンパスでの乳酸飲料製造実習、ハム・ソーセージの製造と収穫祭での販売、卒業論文発表会、新人生歓迎会、前・後期納会、研修旅行、卒業生謝恩会などがあります。

平成十八年度卒業論文題目

氏名

論文題目

指導
教員

浅見 紗里 発酵卵白の製造における発酵促進物質の 渡邊
検査

内山 大輔 卵白卵黄混合系チーズ様乳酸発酵製品の 渡邊
製造

高橋 紀貫 精製塩、粗塩並びに岩塩で塩漬けたラ 松岡
ツクスハムの理化学的性質

高橋 裕一 マリネーションが豚肉タンパク質に及ぼ 松岡
す性質

武中 美央 ヤギ乳ヨーグルトの硬度及びホエー分離 古川
の改善法について

坪井 章 マウスにおける卵白ペプチドの免疫調節 渡邊
作用

内藤由香理 発色剤無添加発酵ソーセージにおける赤 松岡
色ミオグロビン誘導体発現に関する研究

中川 昂 オボムチン由来糖ペプチドの乳酸菌増殖 渡邊
促進

長田 文香 発酵乳α-グルコシダーゼ阻害活性に関す 古川
る研究

名越 友香 豚脂肪をクルミで置換したフランクフル 松岡
トソーセージの理化学的性質

福武 修太 機能性卵白-卵黄混合系乳酸発酵製品の 渡邊
製造

守重 仁美 発酵乳の摂取がマウスの血糖値に及ぼす 古川
影響

遠藤 大輔 干し肉食の赤色化に関する研究 松岡

大野 和泉 乳酸菌の菌垢最近増殖抑制効果について 古川

岡野 恭子 植物性乳酸菌を用いた発酵卵白の製造に 渡邊
関する研究

落合日出子 脂肪酸のアディポカイン分泌に及ぼす発 古川
酵乳成分の影響

小林 千恵 酵素添加による豆乳チーズ熟成の促進化 古川
について

酒井 貴広 アレルギーマウスの抗体・サイトカイン 古川
産生に及ぼす乳酸菌摂取の影響

篠田 知里 培養細胞のサイトカイン産生に及ぼすア 古川
イラグ由来乳酸菌の影響

鈴木 健司 果肉の添加がヨーグルトの酸化化能に及 古川
ぼす影響

鈴木那奈子 発酵乳によるコラーゲン誘発関節炎の抑 古川
制効果

鈴木 瑞穂 受動的回避学習に対する発酵乳由来ペプ 古川
チドの効果

鈴木 勇太 亜硝酸塩無添加によるエルマジオンタイ 松岡
ブソーセージの赤色化に関する研究

安田 大吾 回腸平滑筋の収縮による発酵乳由来ペプ 古川
チドの生理効果の検討

矢野 見佳 発酵豆乳の摂取がアレルギーマウスのサ 古川
イトカイン産生に及ぼす影響

吉野 友紀 ケフィールの抗菌活性について 古川

脇田友紀子 マウスにおける脱脂卵黄タンパク質由来 渡邊
ペプチドの免疫調節作用

関 雄仁 大貫豚肉を原料としたセミドライソーセ 松岡
ージの理化学的性質

千木 大樹 発酵卵白添加による発酵ソーセージの製造 松岡

鈴木 野子 培養細胞のサイトカイン産生に及ぼす植 古川
物性乳酸菌の影響

高橋 彩 酵素添加豆乳チーズ熟成中における乳酸 古川
菌の効果

奥津 大輔 卵白・卵黄タンパク質由来ペプチドの有 渡邊
害菌増殖抑制作用

佐藤 岳彦 マウスにおけるオボムチン由来ペプチド 渡邊
の免疫調節作用

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、細胞遺伝学、育種学、分子生物学的見地から広範囲にわたる研究活動が実施されています。

当研究室では、花田博文教授をはじめ、野村こう講師、高橋幸水助手らのご指導の下、大学院生9名、4年生33名、3年生33名によって構成され、室員各自の自覚と相互の協力によりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられています。主な研究テーマとしては家畜（ウシ・スイギュウ・ヤギ・ブタ）、家禽（ニワトリ）を供試動物として、細胞遺伝学的研究、血液蛋白型支配遺伝子情報・マイクロサテライトマーカー・ミトコンドリアDNA遺伝子情報・Y染色体遺伝子情報による系統遺伝学的研究、品種分化に関する研究などが行われています。研究室では一年を通して新入室員歓迎会、定期総会、収穫際の参加、研修旅行、特別講演会、卒業論文発表会などが行われ、室員は実験動物の管理、毎週行われているゼミ、定例委員会、それぞれのテーマに即した研究などを日々行っています。さらに研究活動は学内にとどまらず、先生方や院生により学会発表などが精力的に行われています。

氏名

論文題目

指導
教員

青木 宏	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	野村
雨宮 千明	体細胞クローン牛の分子細胞遺伝学的研究	野村
飯盛 智子	体細胞クローン牛の分子細胞遺伝学的研究	野村
五十嵐大輔	マイクロサテライトDNA多型情報にもとづくニワトリの系統遺伝学的研究	野村
磯山 翔	ミトコンドリアDNA D-loop領域情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	野村
伊藤 豪	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	野村
岩崎佐央里	DNA多型情報にもとづく会津地鶏の起源と多様性に関する研究	野村
上里 幸治	沖縄在来豚の来歴および特性に関する調査	野村

上田 真実	ミトコンドリアDNA塩基配列情報に基づくヤギの運動能力に関する研究	野村
尾澤 一樹	マイクロサテライトDNA多型情報にもとづくニワトリの系統遺伝学的研究	野村
加藤 達人	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の解析	野村
神田 睦	ミトコンドリアDNA塩基配列情報に基づくヤギの環境適応能力に関する研究	野村
上林真里江	DNA多型情報にもとづく沖縄軍鶏の起源と多様性に関する研究	野村
小林 大樹	頭蓋骨の画像情報解析によるニワトリの品種分化に関する研究	野村
齋藤 雄太	ミトコンドリアDNA塩基配列情報に基づくヤギの環境適応能力に関する研究	野村
鈴木 幸宏	マイクロサテライトマーカーによるヤギの系統遺伝学的研究	野村
五月女勝彦	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の解析	野村
高橋 遼平	DNA多型情報にもとづく鳥豚の系統遺伝学的研究	野村
田上真由美	ヒト疾患モデルマウスの解析と応用	野村
鳥取加奈子	ミトコンドリアDNA塩基配列情報に基づくヤギの環境適応能力に関する研究	野村
富田 愛	マイクロサテライトマーカーによるヤギの系統遺伝学的研究	野村
友石 公彦	血液タンパク型支配遺伝子情報に基づくウシおよびスイギュウの系統遺伝学的研究	野村
豊田 泰洋	毛色関連遺伝子を使った鳥豚の品種識別法に関する研究	野村
中川ゆりの	DNA多型情報にもとづく長鳴鶏の起源と多様性に関する研究	野村
中田 真未	マイクロサテライトマーカーによるヤギの系統遺伝学的研究	野村
野口 和也	マイクロサテライトDNA多型情報にもとづくニワトリの系統遺伝学的研究	野村
伏田 庸平	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の解析	野村
古野 順平	ミトコンドリアDNA Cytochrome-b遺伝子情報に基づくスイギュウの系統遺伝学的研究	野村

堀 和也

マイクロサテライトマーカーによるヤギの系統遺伝学的研究 野村 花田

堀江 賢斗

マイクロサテライトマーカーによるヤギの系統遺伝学的研究 野村 花田

森戸 允彦

ミトコンドリアDNA情報にもとづくニワトリの系統遺伝学的研究 野村 花田

森藤 佳奈

ミトコンドリアDNA情報にもとづくニワトリの系統遺伝学的研究 野村 花田

門田結花里

ミトコンドリアDNA情報にもとづくニワトリの系統遺伝学的研究 野村 花田

家畜生理学研究室

家畜生理学研究室は半澤恵教授をはじめ、吉田豊講師、原ひろみ講師、松林尚志博士研究員のご指導のもと、大学院生11名、学部4年次生27名、学部3年次生37名で構成されています。

本研究室では、家畜・家禽に発現する生理的な特徴やその生理機構の遺伝的支配に関する研究をしており、対象動物によって①ウマに関する研究、②ニホンウズラ・ニワトリに関する研究、③ウシに関する研究、④その他の動物に関する研究に大きく分けられます。

①においては、コンディションの変化による血液性状の変動、赤血球膜タンパク質の遺伝子に関する研究などを行っています。②においては、抗原に対する抗体産生能・アポトーシス・モノクローナル抗体といった免疫学の基礎となる研究、主要組織適合遺伝子複合体(MHC)の分子遺伝学的・免疫学的解析、TLR遺伝子の解析、HSP70遺伝子の解析、腸内細菌と血液性状の関連解析を行っています。③においては、ビタミンA代謝における諸々の現象に関する研究、不死化細胞の染色体解析などを行っています。④においては、アライグマ及び野生ウシバンテンのDNA多型に関する研究が精力的に行われています。

本研究室における日々の活動を紹介しますと、3年次には生理学に関する基礎的な実験の技術を身につけるために講義・ゼミ・実験実習を行うと共に、実験動物の飼育管理、院生・学部4年生の卒業論文の補助として協力し

ています。4年次には前述の研究のほか各個人が興味を持ったテーマを先生方との協議により決定し、卒業論文研究を行っています。院生は、自分の学位論文のテーマに対して日夜研究に精励し、その結果を学会などに発表しています。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭文化学術展・模擬店、研究旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、年2回の納会、実験動物・家畜舎大掃除、週1回のゼミナール等があります。

なお、平成18年度の卒業論文題目は以下の通りです。

平成十八年度卒業論文題目

氏名 論文題目 指導教員

安達真由美 ニホンウズラHSP70遺伝子群の同定および抗HSE抗体を用いた免疫組織学的解析 半澤 原

甘利 美栄 ニホンウズラTLR2およびTLR4遺伝子の解析 半澤 原

大堀佳代子 ウシ乳清タンパク質の投与が母子牛の血(乳)中のビタミンA群濃度と脂質濃度に与える影響 半澤 吉田

岡 佑太郎 ニホンウズラHSP70遺伝子群の熱ストレスに対するmRNA転写量の変動に関する研究 半澤 澤

奥村由香里 ニホンウズラの補体成分C3c4およびC5の遺伝子解析 半澤 原

小田 幹起 ニホンウズラMhc領域DNA多型マーカーを用いた家系解析およびハプロタイプブロックの推定 半澤 澤

覚張 隆史 成熟過程のウマ赤血球に発現するアミノ酸輸送体遺伝子SLC7Aファミリーの解析 半澤 澤

北村 建太 ニホンウズラにおけるDEFB遺伝子座領域の解析 半澤 澤

倉田郁那帆 ニホンウズラCD1遺伝子座の構造解析 半澤 澤

小林 靖代 子牛臓器の抽出液中VA, RBP, IgGおよびβラクトグロブリン濃度の解析 半澤 吉田

杉山 愛 ウズラにおける正常発生胚と発生停止胚との組織性状の比較解析 半澤 吉田

曾我部諒子 ニホンウズラ育雛率の系統間差異の解析 半澤 原

田中 孝尚 ウズラMHCクラスIIβ鎖微動遺伝子座(微動CojaIIβ)の多型解析 半澤 澤

谷 拓朗 乗用馬の赤血球における容積と膜浸透圧脆弱性との関係 半澤 澤

東潤 一暎	家畜ウシの糞DNA抽出法の確立	半澤
濱島由美野	ニホンウズラにおけるHSP90 α の完全長cDNAおよびプロモーター領域の解析	半澤
原 智久	ニホンウズラにおける β -デフェンシン遺伝子の Mapping	半澤
増田 祐樹	ウシレチノール結合タンパク質の免疫組織学的解析	吉田
増山 萌子	ウズラ盲腸上皮細胞および肝臓系細胞の培養法と細胞系の樹立	半澤 原
松本めぐみ	ニホンウズラ幼雛と成熟個体の腸管細胞におけるTLRの mRNA 転写の比較解析	半澤 原
吉住 千奈	ニホンウズラにおける胚発生過程の遺伝子ファミリー mRNA の半定量解析	半澤
吉田誠一朗	正常血漿中の高低 γ 群のニホンウズラにおける血液性状の比較解	半澤
渡瀬 健介	ニホンウズラにおける補体制御因子の遺伝子解析	半澤
和田 晃	ニホンウズラHSP70遺伝子の発現とHSF 半群の作用解析	半澤

家畜衛生学研究室

わが家畜衛生学研究室は、室長の渡邊忠男教授をはじめ、井上武教授、村上覚史助教授のご指導のもと、四年生三十四名、三年生三十三名で構成されています。室員は各自で希望する対象動物別に、実験動物班、牛班、豚班、鶏班の四班に分かれ、各家畜・家禽等の疾病とそれに対する予防法および環境衛生などの研究を行っています。

家畜衛生とは「家畜・家禽の生命を脅かす種類の健康障害因子を除去および予防し、生命の延長をはかり、かつ生産性の向上」というのが元来の目的とされてきましたが、最近では「動物の福祉」という観点から家畜伴侶動物（コンパニオンアニマル）の衛生管理法など家畜や家禽以外の動物もその対象となってきました。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭では模擬店で「しし汁」を出店し、文化学術展にも参加、その他に年二回の納会、研修旅行、月二回の定例会、年末には餅つき、慰霊祭等があり室員の団結を深め、各々が目標意識を持って有意義な研究および研究室活動を行っています。

なお、平成十八年度の卒業論文の題目は次の通りです。

平成十八年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導 教員
大野 亜美	ウシ乳清タンパク質の投与が母子牛の血(乳)中IgG濃度と β -Lactoglobulin濃度に与える影響	吉田
田中 順	ウマ赤血球系幹細胞に発現するグルタチオンシンターゼ(G6P)の塩基配列の解析	半澤
村田 友里	正常血漿中の値高低 γ 群のニホンウズラにおける腸管細菌叢の比較解析	半澤 原
浅沼 史子	家畜衛生学研究室の飼育豚における皮膚疾患の原因究明	村上
石井 謙三	ステビア投与が産卵成績および抗体産生に及ぼす影響	西脇
薄井 梢	鶏のコクシジウム感染に対する系統間差異の検討	村上
浦山枝里子	福島県内の傷病野生動物における内部寄生虫について	村上
江川あずさ	バイオ化粧品品の皮膚毒性と抗菌作用	西脇
大塚満実子	畜舎における衛生害虫の季節的変動	村上
尾関 啓作	厩舎の衛生害虫について	村上
春日あゆみ	アニマルセラピー施設の衛生学的考察	村上
片山 太郎	投与飲料が犬の血液性状に及ぼす影響	村上

神子 佐恵 豚肝白斑症由来細菌に関する研究 村上 渡邊

河野 晋吾 鮭抽出物のDSS腸炎におけるリンパ球動態への影響 渡邊

樽林 由夏 ポータブル血液分析器を用いた老齢犬の血液検査成績 村上 渡邊

小山 智之 豚舎で使用する消毒剤の検討 村上 渡邊

今野 美香 運動前後における乗用馬の尿成分の比較 村上 渡邊

渋谷 郁里 産業動物における糞尿処理の現状調査 村上 渡邊

清水 麻菜 各種のストレスが犬に与える影響について 村上 渡邊

菅澤奈充子 ポータブル血液分析器を用いた綿羊の血液検査成績 村上 渡邊

鈴木 慎一 アスタキサンチンの投与が豚のピロリ菌感染に及ぼす影響 村上 渡邊

滝沢 是子 鮭抽出物のDSS腸炎における腸管マクロファージ系細胞への影響 村上 渡邊

和田ゆかり 犬の排泄物に対する刈草処理物の消臭効果 西脇 渡邊

澤井 慎 ニホンライチョウに寄生する住血原虫のベクター検索 村上 渡邊

辻 ことな 豚扁桃由来細菌に関する研究 村上 渡邊

宮保 真之 人と動物の関係に対する日本とアメリカの差異 村上 渡邊

浦井美保子 イヌの体表付着細菌について 村上 渡邊

小林 健太 畜舎消毒に対する各農場の管理状況調査 村上 渡邊

種子田和子 ベパーミントを用いた犬の排泄物に対する消臭効果 西脇 渡邊

西 恭子 畜舎飛来サンバエの家畜衛生学的考察 渡邊

野田 ちか 育成豚における下痢症の疫学的考察 渡邊

東瀬 智子 富士農場飼養鶏のサルモネラに対する疫学的検査について 西脇 渡邊

福島 渚 害獣駆除動物の消化器管内寄生虫について 村上 渡邊

前田 千晶 学校飼育動物に対する衛生学的考察 西脇 渡邊

増岡 智之 茶葉給与がメン羊の大腸菌群に与える影響 村上 渡邊

望月映理子 飼育犬に対する公衆衛生学的調査 村上 渡邊

山岡 優 豚の排泄物に対する刈草処理物の消臭効果 西脇 渡邊

山崎知恵子 ホルマリン廃棄処理法の検討 村上 渡邊

山本 翔 綿羊における消化管内寄生虫の疫学的検討 村上 渡邊

野生動物学研究室

本研究室は天野教授、小川教授、安藤助教授の指導のもと、室員がそれぞれの目的を持って研究活動を行っている。我々は野生動物の分類、行動、生態学的な研究を行うため、フィールド調査（サンプルの捕獲や生態行動観察等）を行っている。また、研究室で動物を飼育し、繁殖、成長などに関する研究や、分子遺伝学的な研究を行っている。

研究の対象は、モグラ、コウモリ、ヤマネ、ネズミ類などの小型哺乳類、ネコ、リス、モモンガ、テン、アナグマなどの中型哺乳類、シカ、ニホンザルなどの大型哺乳類である。また、近年日本の生態系に影響を及ぼしている外来種のアライグマやハリネズミなども研究対象としており、他にもウズラ、ホロホロチョウ、スズメなどの鳥類の生殖や生態といった幅広い研究を行っている。これらの研究を通して、生物資源として重要な野生動物の種の保存、および特性の解明を目指している。

平成十八年度卒業論文題目

氏名 論文題目 指導員

阿子島大輔 オオタカの遺伝的構造解析 小川 天野

朝倉 歩未 アライグマの生息痕の特徴、及び異なる年齢査定法間の精度比較 天野

飯岡 晋介 三宅島におけるアカネズミ *Apodemus speciosus* の集団サイズおよび生息分布の推定—間接的密度推定法の応用— 天野

植田麻里絵 東京農業大学厚木キャンパスおよびぼうさいの丘公園における繁殖期の鳥類相 天野

植村 卓哉 足跡スタンプ法を用いたアライグマとタスキの競合可能性の検証 天野

岡本 秀雄 三宅島におけるアカネズミ *Apodemus speciosus* の集団サイズおよび生息分布の推定—間接的密度推定法の精度— 天野

小澤 祐介 アライグマによる在来中型哺乳類への影響 天野

金山 尚史 厚木市周辺部の緑地における中型哺乳類の側溝利用状況 天野

河島 正幸 代理卵殻法による簡便なヒメウズラ胚の培養法の検討 天野

木島 修輔 来園者が求める動物園像の分析 天野

難波海南子 放野された傷病タスキの追跡調査 天野

根本 緩子 ゴールデンハムスター (*Mesocricetus auratus*) における糞中ホルモン濃度の変化 天野

橋本真里奈 野外におけるモグラ忌避剤の効果 天野

林 亜希子 傷病鳥獣の野生復帰に関する事例研究 天野

原 真樹子 厚木市およびその周辺に生息するニホンザルの人馴れ現象 天野

藤田 和宏 広域獣害防止柵のニホンジカ *Cervus nippon* 侵入防止効果の検証 天野

増田 亮平 センサーカメラを用いた毛無山における哺乳類の生息状況に関する調査 天野

八城 礼子 野ネズミを用いた環境教育プログラムづくり 天野

山田 耕平 神奈川県におけるアライグマに対する住民意識の推移 天野

若林 輝明 毛無山における小型哺乳類の生息状況について 天野

北島 大 カワネズミにおける非捕獲式生息確認法の実用化研究 天野

河野 吉樹 糞分析によるニホンモンガ *Pteromys momonga* の食性解明 天野

小松 恵子 神奈川県小田原市におけるマンシュウハリネズミ (*Erinaceus amurensis*) の生息状況 天野

佐藤 絵里 ラムサール登録湿地の野生動物生息地としての定量的評価 天野

鈴木 一聡 小型哺乳類が落下・死亡する可能性のある人工水路の事例について 天野

鈴木 紀行 カワネズミ *Chimarragal platycephala* におけるカゴワナを用いた非捕獲式生息確認法の開発 天野

田中 竜太 ラムサール登録湿地における人と野生動物との共生にかかる定量的評価 天野

茅根 健次 ヒメネズミ *Apodemus argenteus* の昼夜逆転展示における照明条件 天野

中野 亮 センサーカメラを用いた小型野生動物の定量的な調査方法について 天野

中村 祐太 ホロホロチョウ (*Numida meleagris*) における産卵周期 天野

酒井 翔子 ニホンウズラとニワトリを使った異種間胚盤葉キメラ作出法によるキメラ胸腺の作出 天野

須江 洋輔 大格鶏の育種を目標とした基礎的研究 天野

蓮見 桃子 日本型の動物福祉に関する考え方の分析 天野

畜産マネジメント研究室

新たに畜産マネジメント研究室が平成十八年度にスタートしました。生産・流通・消費からのアプローチをサブテーマとして、畜産（肉牛・酪農・養豚・養鶏）における経営経済問題について、生産から流通・販売・消費などの諸過程と関連付けながら取り組んでいます。十八年度は新たな研究室発足の準備期間ということでスタッフは信岡誠治助教一名のみで、学生は配置されていませんでしたが、十九年度からは3年生20名を室員として受け入れ本格的に研究室がスタートします。スタッフも十九年度からは新たに嘱託教授を加え信岡助教と2人態勢となります。

当研究室の使命として、わが国の畜産の将来を担う後継者および就農者を養成することも含まれていますので、パソコンを活用した経営演習に加え畜産経営のプロを育てるべくできるだけ畜産経営の現場にでかけ実戦的な経営を学んでいきます。新たに室員となる3年生の意向をきくと酪農をやりたいが7人、肉用牛をやりたいが2人、養豚をやりたいが2人です。畜産農家の後継者を含め畜産の現場で活躍したいという人が多いのは頼もしい限りです。

研究活動としては現場の畜産経営者が抱えている問題を一緒に考え、具体的な解決策を見いだしていくことをベースに取り組んでいます。具体的には、飼料価格の高騰に対応するとともに畜産物の安全性と高付加価値化を

図るため飼料米の研究に取り組んでいます。飼料米は養鶏、養豚だけでなく酪農、肉牛、その他の家畜にも幅広く利用できます。また、これらの畜産物のマーケティングや認証制度の構築に取り組んでいます。

退職にあたり

西脇先生との思い出

ラクロスサークル一同

西脇先生にはラクロスサークルの顧問として五年間、夏のリーグ戦から波崎オープンの合宿まで、面倒を見ていただいたり、私達サークルのメンバー全員を我が子のように可愛がってくださり、大変お世話になりました。

日頃の練習も頻繁に見に来てくださったり、夏のリーグ戦期間には試合会場が遠く、朝が早いにも関わらず、何度も足を運んで私達を応援してくださいました。収穫祭ではメンバーがステージ企画に参加する度、カメラを持ってメンバー一人一人を撮影したり、模擬店では準備から色々なことを気にかけてくださって、一緒にジャガイモの皮をむいたりして、手伝ってくださいました。人数の少ない私達が模擬店を成功させることができたのも先生の多大なご協力があつたからです。

私達ラクロスサークルにとって西脇先生は、一チームメイトであると共に、サークルという集団の家族のような存在です。そして、ラクロスサークルが創立してからずっと、私達と共に歩んできてくださった西脇先生が退職されてしまうのはとても寂しいですが、これからもラクロスサークルを温かく見守っていてほしいです。



本当に感謝しています。ありがとうございました。

退職にあたって

家畜衛生学研究室

井上 武

この度、本年3月の退職予定者として本誌への原稿依頼を受けた。私が本学に大学院担当の嘱託教授として採用されたのは2003年(平成5年)4月であるので、承諾はしたものの、在職期間は原稿を書いている時点で、3年9ヶ月、しかも大学院担当のため狭い範囲の経験しかなく、接触した学生数は限られている。従って、ここに書く内容は射ていないことも出てくるかと思うので、その点はご容赦頂きたい。

指導した大学院生は、修士の学位授与者数として2004年3月に4人、2005年度3月に1人、2006年3月に2人の計7人であり、博士の学位授与者として2004年3月に1人、2005年3月に1人の計2人である。更に論文博士取得希望者1人を現在審査中である。現在、研究室には院生はおらず、寂しい限りである。ここ2年ほどは学部卒業生の就職は売り手市場の感があり、大学院進学希望者数は減少してきているようである。今後期待することは社会人として働く経験をして、その中で自ら問題を発見、設定し、解決出来る能力を養うために自立した研究者、あるいは高級技術者を目指して、

の構造、病原性、起源、ワクチンなどである。(4)「牛海綿状脳症(BSE)」では日本および世界での発生状況、病原体であるプリオンの性状、屠畜場でのBSE検査法などである。以上いずれの感染症についても、出来る限り最新の知見を盛り込んで講義を行い、資料としてプリントを配付して理解を助けるようにした。また、一部ではビデオを使用した。この年の受講者は家畜衛生学を専修とする院生と他の専修の院生であったので、感染症に対する基礎知識に差があり、院生の興味と理解度に差があったように思う。2回目は、受講生が専修外の院生のみであることを考慮し、かつ一方通行的な講義ではなく、互いに議論しながら学生の理解を深める方法として、ゼミ形式を採用して、感染症に関する英文の総説を用いて、学生の分担を決め予習を兼ね、かつ英文読解力を高める目的で日本語訳をさせ、正確に理解するのに必要な説明を加えることとした。さらに学生との質疑応答を行い、疑問の解消と十全な理解を計ることにした。前期に細菌の病原性因子の遺伝子支配に関する総説、後期には飲料水の細菌学的安全性に関する総説を使用した。この場合、英文総説の選定が難しく、文献検索のみでは内容、英文の難易度がよく分からず、他大学の図書館に行き、実際に読んでみて選定をしたが、時間、場所など種々の制約があり、使用した総説が適切なものであったかが問題となる。また、質疑応答を行うと専修外の院生から予想外の質問が出て、基礎的なレベルから説明を必要とするなどで、予定通り進まず、進行が大いに遅れてしまうこと

再度大学に戻り、大学院に入学する卒業生がでると嬉しい限りである。また、学部学生に対し良い刺激を及ぼすことが期待される。

大学院教育をめぐっては、平成18年3月に出席された大学基準協会の「東京農業大学に対する相互評価結果ならびに認証評価結果」で指摘されるとともに社会的要請にも伴い、来年度から大学院の特論講義、特論実験のシラバスを作成し講義、実験の内容を事前に明確にし、評価方法も明らかにすることになりました。今後は従来よりもより一層の充実が求められることとなります。更に今後学部の講義と同様ファカルティブ・ディベリテイメントも考慮する必要があると思えます。

私の担当している「家畜衛生学特論」は隔年で実施されるので、4年間で2回行った。この「家畜衛生学特論」では1回目には講義を中心に通年で20回実施した。講義内容は数種の感染症にテーマをしぼり、講義を行った。以下にその感染症と内容について要点を説明する。すなわち、(1)「病原性大腸菌症」では、病原性大腸菌の病原因子、それを支配する遺伝装置、その宿主細胞への定着に於ける病原遺伝子の役割、大腸菌の進化の過程における遺伝装置の獲得、病原性大腸菌の分離、同定法などである。(2)「鳥インフルエンザ」では発生状況、大流行の歴史、遺伝子の特徴、抗原の変異、新型ウイルスの発生の可能性、ワクチンの開発などである。(3)「重症急性呼吸器症候群(SARS)」では、発生状況、SARS病原体(ウイルス)の発見、同定、分類、ウイルス粒子およびゲノム

になる。来年度以降、シラバスを充実させ、シラバスにもとづいて講義を行うとなると、この方法は許されるようになるであろう。

講義充実に伴う問題点として危惧されるのは、講義と修士論文作成実験との関係である。従来は修士論文実験を優先的に取り扱ってきたと思うが、講義は2単位で15回の講義回数が必要となり、さらに成績評価のためには必要出席回数設定、レポート提出の義務化あるいは場合によっては定期試験の実施などが求められかも知れない。即ち、修士論文のレベル維持の問題とからんでくる。また、院生には必要な教育経験との観点から学部学生の実験実習の補助、卒論学生の指導補助への参画などが行われているが、今後これらも解決の迫られる問題となるであろう。

以上4年間の短い本学での経験と最近の大学院教育―特に特論の講義―に関する動向について感ずるところを書いてきたが、纏まりのない文章になった。ご寛容頂きたい。これをもって編集委員の依頼に対する責めを果たしたい。

ウガンダにおける野生動物の価値

野生動物学研究室助教
安藤 元一

野生動物学研究室には、希少な野生動物を保護したいという学生が毎年数多く入ってきます。こうした学生に対してなぜ野生動物を保護せねばならないのかとたずねると、答えに窮してしまうケースが多くみられます。私は1970年代前半に大学を卒業して最初の仕事として東アフリカで野生動物映画の撮影チームに加わりました。その途中でウガンダのビクトリア湖畔、エンテベ市にある小さな動物園の展示室を訪れた際、野生動物の価値を11項目で説明した写真のような張り紙を見つけました(図1)。天然記念物を保護するような仕事こそが野生動物保護だと考えていた私にとって、野生動物の価値が国によって大きく異なることを知ったのは大きなカルチャーショックでした。それから30年以上が経過した現在、あらためてこの張り紙を見直してみると、価値観が地域によって異なるだけでなく、時の経過によっても変わってくることがわかって、下記のように今でも新鮮に思えます。

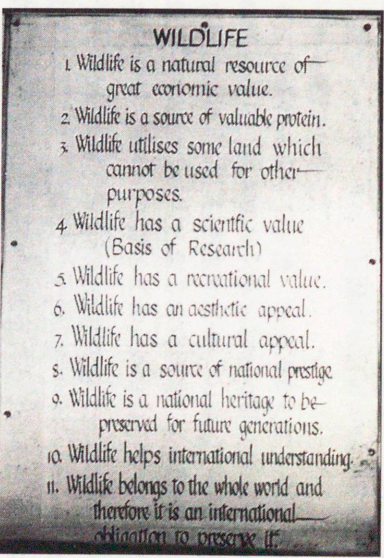


図1. 30年前にウガンダの動物園でみかけた張り紙

1. 野生動物は大きな経済価値を持った天然資源である。畜産学における野生動物の最も重要な価値は、遺伝子資源をはじめとする動物資源としての価値でしょう。ですから畜産学を学ぶ人にはこの項目は当然に思えるかも知れません。また環境省に環境経済課が平成13年から設置されるなど、環境を貨幣価値で計るという発想も今でこそ一般化してきました。しかし1970年代の日本には経済価値を野生動物価値のトップに据えるという発想はありませんでした。それどころか、中国の動物図鑑に経済価値という記載欄があるのを見て、みんな笑っていたというのが実情でした。環境保全と資源価値が大きく関わるという発想が我が国に定着してきたのは、1992年の生物多様性条約の採択を巡る論議のあとくらいからです。

2. 野生動物は貴重なタンパク源である：

開発途上国の中でも特に開発の遅れた国は後開発途上国(LLDC)と呼ばれます。一人当たりGDP、平均余命、製造業の割合などを基準に決定されますが、世界のLLDC48カ国のうち33カ国がアフリカにあります。これらの国では高価な畜産物から動物タンパクを摂取することが困難なので、淡水魚が大事なタンパク源になります。ブッシュミートとよばれる野生動物の肉も同様です。しかし肉を求めて野生動物を乱獲すれば動物が減ってしまうので、適切な資源管理が必要であり、そのことが野生動物の保護につながるという考え方です。使いながら守るという資源管理型の発想は漁業や林業のベースです。野生動物の肉を食べることが保護につながるという発想は国内にはありませんでしたが、近年は我が国でも増えすぎたシカの肉を食べようという動きがあります。

3. 野生動物は他の目的には使用不可能な土地をも利用する：

ケニヤの首都ナイロビの郊外にはサバンナがいきなり広がっています。土壌がやせていて農業に使えないためです。粗放的な放牧が行われている国の土地利用を模式的に見ると、最良の生活条件を備えた場所に都市が発達し、土壌の肥沃

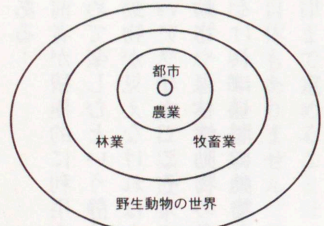


図2. 野生動物の住み場所

4. 野生動物は科学研究する価値を持つ：

我が国では実学的な発想から、科学研究は何か役に立つために行われると考えるのが普通です。例えば野生動物の生態論文にはしばしば「保全に資するため」といった表現が見られます。これに対して西欧では研究すること自体、すなわち知的好奇心を満たすことが目的であるという考え方が強いようです。対象動物がいなくなれば研究する楽しみがなくなるのではないかとというわけでは、農学部と理学部との発想差といってもよいでしょう。神が作った世界がいかに秩序に満ちているかを証明する作業は、神が存在することの証しであるというキリスト教の影響なのかもしれません。

5. 野生動物はレクリエーション価値を持つ：

エコツーリズムに代表されるように、これはわかりやすい価値です。しかしこうした発想が一般化してきたのは1990年代からであり、1970年代に野生動物が国の重要な外貨収入源資源となっているのはサファリツアーで知られる東アフリカくらいしかありませんでした。

6. 野生動物には景観的な魅力がある：

これも前項と似ていますが、前者が積極的に利用するという意味合いなのに対し、眺めて楽しむという静的な利用法です。このためには野生動物が見えなければなりません。草原性の大型動物の多いアフリカでこそ大いに強調できる価値でしょう。小型動物や森林性動物の多い我が国では、餌付けなどを行わなければ昼間に動物を見ることは容易ではありません。

7. 野生動物には文化としての魅力がある：

宗教、民俗、歴史景観などの文化と自然生態系との関わりが世界中で注目されだしたのはこの10年ほどです。国連機関や世界資源研究所などが世界の生態系現況を「ミレニアム生態系評価」として2005年にとりまとめました。この報告では「生態系サービス」という用語を用いて、生態系は食料や燃料の供給など物質的な面だけでなく、肉體・精神的な健康や良好な社会関係を築くためにも人類に対して貢献している点を強調しています。動物と人間との多様な関わり方を研究しようという発想は、本学に新設されたバイオセラピー学科の主旨でもあります。

8. 野生動物は国の威信の源である：

アフリカ諸国は密猟の横行などをしばしば西欧諸国から非難されます。我が国もクジラ問題や象牙の輸入などで西欧からしばしば非難されますが、野生動物の管理が家湿地政策」を採択し、大統領が国民に湿地の価値を理解し保全を進めるよう呼びかけるなどの取組を進めてきました。その努力が認められて、2005年には同条約の締約国会議がアフリカで最初に開催されました。

11. 野生動物は世界全体の所有物であり、それゆえにそれを保存することは国際的な責務である：

こうした発想に基づいた活動例として、米国では1997年にアジアゾウ保護法（米国）が定められ、米国野生生物局は自国には生息していないアジアゾウの保護活動に取り組んでいます。同法の前文には「アジアゾウ生息域において、国家保全プログラムや優れた経験を持つ人々によるプロジェクトを財政支援することによって本種の保護をはかるため、この法律を定める」とあります。もともと、こうした発想は他国への介入を正当化することにもつながりませんが、他方、我が国では行政が国際協力の一環として海外の野生動物にかかわることは可能ですが、米国のように法律まで定めることはできないでしょう。そのような発想自体ありません。若い方と話すなかで最近気になるのは、興味の対象が身近な野生動物や伴侶動物に限られていることです。アフリカのゴリラ問題に取り組みたいといった学生には近年出会ったことはありません。

できない遅れた国であるとのイメージをなんとかしたいという思いは、これらの国では我が国の場合よりもはるかに強いと思われる。

9. 野生動物は未来の世代にそのまま伝えてゆかねばならない国の遺産である：

これは世界遺産条約の発想そのものです。この条約は1972年に採択され、世界遺産リストへの登録は1978年から始まっていますので、この張り紙が書かれたのは採択間もない頃です。日本がこの条約を批准したのは先進国では最後の1992年であり、1970年代に世界遺産条約のことを知っている人はほとんどいなかったでしょう。

10. 野生動物は国際理解を促進する：

この例は1971年に採択されたラムサール条約に見られます。例えばある国において渡りをする水鳥の生息地が失われてしまえば、その鳥は渡り先の国にもいなくなってしまうます。こうした問題に取り組むためには、国際的な情報交換や共通の目標を定めた協力体制が不可欠になります。私が訪問した当時のウガンダは、独裁で悪名高いアミン大統領の統治下で、外国人の追放などで経済は完全に破綻していました。その後もタンザニアとの戦争やエイズの蔓延など次々と問題が起って貧乏国である状況は変わっていませんが、1990年代にはラムサール条約加盟国としてはカナダに次いで2番目に「国

さて質問です。ウガンダと日本、1970年代にはどちらが野生動物に関して開発途上国だったのでしょうか。そして現在ではどうでしょうか。

袖振り合うも多生の縁

野生動物学研究室教授

小川 博

「袖振り合うも多生の縁」とは見知らぬ人と袖が触れ合う程度のことでも前世からの因縁によるものだということがわがです。

私が農大にお世話になって32年が経ちますが、「ふじみの」に原稿を書かせていただくのは今回が初めてです。実は、学生時代の6年間を除くと畜友会の会員だったのは平成13年から16年までの4年間だけです。現在もバイオセラピー学科の所属なので、畜友会の会員ではないと思いますが、違うでしょうか。私は農場に勤務していた関係で、畜産学科とは密接に関わっていたのに畜友会とはあまり縁がなかった訳です。

人と人との関係ができるきっかけを縁といいます。「縁」というと、悪意のある人のいいがかりみたいな感じがしますが、元々は仏語（フランス語ではない）で結果を引き起こす直接の内的原因を「因」といい、それを外から助ける間接的原因を「縁」というそうです。したがって、縁は関係を持つきっかけやチャンスであるといえます。良くも悪くも多くの人が、「コネ」とか「縁故」というつながりを頼る訳です。「縁は異なもの」という

うこと、スクールバスの運転をしてくださるSさんの趣味がランチユウで、昔から毎年必ず愛知県にある私の実家（実家のある町は金魚の生産で有名で、私の実家もかつては金魚の養殖をしていました）のすぐ近くまで来ていること等があります。どれもどうでもいいような些細なことですが、Sさんとはお互いに事情が分かって以来よく金魚の話をしています。思いがけない「縁」には何か親しみを感じることがあります。

農大生は、同じ志を持って大学に入った仲間だと思えますが、農友会や畜友会の活動に積極的に参加する人もいれば、残念なことに自分には関係のないことのように避ける人もいます。中には農大に入ったのに、収穫祭や体育祭と「無縁」で卒業する人もいます。自分で意識している人は少ないと思いますが、これらの活動に参加している人は、社会に出ると求められる、問題解決能力、協調性、指導力など実に大切な能力を養っていると私は思います。なによりも、これらの活動を「縁」に友人ができたのではないのでしょうか。

せっかく「因」により農大に入学したのですから、大学でのいろいろな「縁」を利用しない手はないと思います。たまに研究室に口コミの求人情報が来ます。なるべく平等にと掲示は出しますが、研究室活動を頑張っている、研究室によく顔を出す人が真っ先に見つけるのは当然かと思えますし、声をかける場合も同様です。研修先や就職先への推薦状を頼みに来る人がいますが、自分の信用を失うことにもなりかねないので、知らない人を推

と、男女の縁は理屈でなく不思議なものであるという意味ですが、男女の関係に限らず人は様々な関わりなしには生きていけないので、年をとるにつれて縁が多く生まれます。縁がしがらみとなる場合もありますが、中にはなにか不思議な偶然を感じる出逢いがあります。

九州大学のF先生は動物の代謝や行動制御が専門で、日本家畜学会賞を受賞していますが、私も同じ賞をいただいております。私は2004年に農大の厚木キャンパスで開催された鳥類の内分泌研究会の事務局をしました。翌年、F先生がその会の事務局を引き継いでくれました。鳥類の研究者なら日本中に大勢いますので、別に当たり前のことかもしれませんが、F先生と私が幼なじみで幼稚園の時、一緒にお遊戯をした仲間だとしたら奇遇だと思いませんか？今も家のアルバムにはその時の写真があります。実は私はこの写真の自分が他の人と違うポーズをしていた（本人は正しかったと思っていますがどうやら踊りを間違えた）ので、あまり好きな写真ではなかったのですが、実はF先生もこの写真は自分だけ靴下をはいていなかったの嫌だったという話を聞いてから、とても思い出深い写真になりました。学会の時、件の写真を大きく映してこのことを紹介したのは、F先生も奇遇に思っているからだと思えます。

他にも奇遇だと思うのは、バイオセラピー学科に赴任されたK先生が幼少の頃住んでいらつしやった家が、私の家内の実家の向かいだったこと、畜産学科のI先生のご両親が私の実家がある町に住んでいらつしやったという事です。

2006年度から、野生動物学研究室はバイオセラピー学科へ異動しましたので、やがて畜産学科の学生を研究室の室員として迎えることはなくなりますが、これからも畜産学科OBとして畜産学科を応援していきたいと思っております。



「就任の抱負と飼料米構想の実現に向けて」

畜産マネジメント研究室助教授

信岡 誠治

「抱負にかえて」

私は平成18年4月に新たに発足した畜産マネジメント研究室の助教授として就任しました。これまで27年間にわたり全国農業会議所という農業全国団体の職員として働いていましたが、このたび東京農業大学農学部畜産学科の教務職員として転職したわけです。前職では全国農業会議所が発行する全国農業新聞の編集・取材の業務に従事してきたほか、全国養豚経営者会議の事務局局長（出向）を歴任し、全国農業会議所の調査部時代には田畑売買価格（農地価格）、水田小作料・畑小作料、農作業料金・農業労賃、畜産的土地利用などの調査・分析業務に従事してきました。また、全国農業新聞の編集部副部長として企画・編集・取材・整理などのほか管理職の仕事にも従事してきました。

これからの研究活動についての抱負は、国民経済の中で畜産の位置づけを構造的に明らかにすることです。WTO交渉やFTA交渉では畜産の存在意義を問われてきていますので、私としては農業の中で畜産として整理、体系化したいと考えています。

現場（フィールド）を持って研究と教育を行うことは、実践的であり畜産経営者からの期待に応えることになるかと思えます。その方法論としては、少し欲張りかも知れませんが自然科学と社会科学が融合した取り組みができないかと考えているところです。具体的には、飼料米構想の具体化です。この構想を「農業と経済」（平成18年11月号）で執筆しましたので、ここでその内容を転載させていただきます。ご興味のある方は、是非一緒にやってみましょう。

「飼料米構想の実現に向けて」

地域資源を活かす戦略と耕畜連携

―飼料米構想の実現へ向けての具体策―

1 はじめに

わが国農業の展開で地域資源を生かす戦略を考える場合、最大のポイントとなるのは全国に広がる水田をどう生かすかである。水田農業については過去36年間にわたり減反政策を継続し6兆円以上の財政資金を投入してきたが、この政策の功罪を考えると最大の功績は曲がりなりにも「水田を水田として維持」してきたことである。

とくに、農業ジャーナリストとしての職歴が長いことから農政の現場の動きについては日常の業務として、政策形成のメカニズム、その論理構成と背景にある課題については解説や評論の執筆活動を行ってきました。情報処理では昭和50年代からパソコンを手がけ、調査部時代には自作パソコンを組み立て、VBAマクロによるプログラム開発などに夢中で取り組み途中で体調を壊したことが懐かしい思い出です。

研究活動は約15年前から本格的に始めましたが、日本農業経営学会などの学会活動に参画し学会発表や論文執筆を重ねて、学会の常任理事や学会誌の常任編集委員なども経験することができました。日常の仕事の合間をぬっての学会発表や論文執筆でありましたので、博士論文を書くまでに10年以上もかかってしまいました。最新の研究としては、とくに遊休農地の実態と今後の活用に関する調査においては全国悉皆で本格的なアンケート調査等を実施し、定量的、定性的な実態を明らかにしてきました。また、資源循環型畜産の展開条件をめぐる諸課題について、とくに土地利用の観点から「畜産的土地利用からみた農地流動化の現状と展望について」の研究を行いとりまとめ「資源循環型畜産の展開条件」（平成18年1月出版）で共同執筆しました。

これまで、取材記者として現場主義で全国各地を飛び回り、海外取材も8回ほど経験してきましたが、地方の現場（試験研究機関、農業者、行政、企業など）取材での経験は、私にとっては貴重な財産です。

膨大な負担を国民が受け入れてきたのは「安心料」ということであろう。食料安全保障の面で水田を水田として維持しておけばいざという時の備え（担保）になるからである。

しかし、経済のグローバル化の進展に伴い、国民経済における農業の比重は相対的に低下し、食糧自給率はカロリーベースで半分以上の40%となってしまう。いま「安心料」は果たして有効に機能してくれるのか。いまだれしも疑念を抱いているのではなからうか。

さて、そこでその疑念を払拭するにはどうすればいいのか。今日の農業政策の最大の眼目とされているのは食糧自給率の向上である。しかし、残念ながらその処方箋は具体化されていない。そこで、本稿では今日的な意味で、食糧自給率を高めるといえるのはどういうことなのか、その処方箋はあるのかを問うてみたい。

2 食糧自給率向上の最大の課題は水田での飼料穀物生産

水田農業を行う稲作農家は手足を縛られた状態で食料米の計画生産に取り組んでいるが、せっかくな温存してきた水田をフルに活用できないのは切迫扼腕であろう。百万畝以上に及ぶ水田が本来の生産力を発揮できずにいること自体、大きな矛盾であることはだれしも異論ないであろう。

他方で、わが国の食糧自給率は先進国中で最低レベルに低下している。その最大の要因は、いうまでもなく畜産物の消費増大、それに伴う海外からの輸入飼料穀物の

増大である。

世界の三大穀物としてはコメ、ムギ、トウモロコシがあるが、わが国ではコメ以外は自給をあきらめて海外に依存する政策をとってきたことが背景としてある。

世界全体をみると、それぞれの穀物の生産量はFAOの統計(2005年)によるとコメが約六億一千万ト(もみベース)、トウモロコシが六億九〇〇万ト、小麦・大麦が七億六〇〇万トの規模に達しているが、収穫面積はコメが一億五三〇〇万畝(2005年)、トウモロコシが一億四七〇〇万畝、小麦・大麦が二億七三〇〇万畝で、生産量の増加はもっぱら作付面積の増加ではなくて単収の増加によって支えられてきているのが実態である。ちなみに単収を計算すると世界の平均は一〇噸当たりコメでは四百kg、トウモロコシは四百七十kg、小麦・大麦は二百八十kgとなる。これまでと同様に単収の伸びが続けば、現在六十五億人を突破した人口増加の圧力になんとか対応していけるが、中長期のスパンで考えるとその見通しは樂觀できない。加えて、最近の石油エネルギー資源の高騰は代替エネルギー資源(バイオエタノール)としてのトウモロコシの需要を喚起してきており、飼料や食料との競合が懸念されている。この穀物のうち家畜の飼料として利用されているのは六億八〇〇〇万ト(2003年、FAO統計)であるが、穀物によりその割合は大きく異なっている。トウモロコシは六四・六%、大麦は六七・四%、小麦は一六・四%であるが、コメはわずか一・八%にすぎない。

その要因は「コメは人間の食用であり、家畜のエサにす

値では一一%であるが、八百万トを飼料米として利用すれば一挙に五二%に向上でき、食料自給率も大幅に向上させることができる。これを夢物語に終わらせてはならないと考える。

3 常識を打ち破ることからスタート

これまでは、コメは高いので飼料化はできないというのが常識で畜産サイドも飼料米生産には目をくれないというのが実態である。日本の場合、飼料米を実現するにはこの間違った思い込みを打破することからスタートしなければならぬ。

アメリカではトウモロコシ、ヨーロッパではムギに代表されるように畜産の飼料は、本来それぞれの地域で取れる自給穀物を飼料化してきているが、これはそうするのが一番安いからである。アジアでは人間の食糧としてコメが定着しているが、これまではコメ不足の中で飼料化は本格的には検討もされてこなかったのが実態である。

米価は日本では海外との競争力が全くないが、海外に目を向けるとアジアの稲作農家の農家手取り米価はkg当たり10円ほどである。トウモロコシやムギとひけをとらない競争力を持っているのがコメであることを確認しておくことが必要である。検証が必要であるが穀物の中では最も生産コストが安いのがコメなのかもしれない。

コメの平均単収は現在トウモロコシよりも少し低い、その安定性と伸びの可能性はトウモロコシよりも高いと考えられる。単収は食味を収量目標から外せば現在の2・3

るのは倫理に反する」というような心理的な抵抗感が強かったためなのかどうかは検証が必要だが、長い間コメは人間が食べるのに精一杯で不足してきたことから飼料用に生産するという発想そのものが生まれなかったためと考えられる。また、日本独自の要因としては圧倒的な価格差があることが指摘できる。食用米はkg当たり三百円であるのに、飼料用となるとkg二十円前後で十五倍の価格差がその途を阻んできた。日本の場合、前者の心理的な要因よりも後者の経済的な要因の方が大きかったし、現在もその構造は変わっていない。

しかし、三十年以上にわたる減反、食生活の変化に伴う恒常的なコメ過剰の中で、この構造に風穴を開けることが求められていると考える。すなわち、水田での飼料穀物の本作物である。この場合、水田の生産力をフルに発揮するものであれば穀物の種類は問わない。トウモロコシであっても良いし、麦やミレットやソルガムであっても良い。しかし、水田で一番生産力を発揮する穀物はやはりコメである。コメは地域資源として最も広く存在している水田をそのまま活用でき、技術やノウハウも蓄積され、機械装備もあることから最も取り組みやすい穀物である。

水田で飼料としてのコメを本格的に生産すれば、食糧自給率の向上は間違いない。仮に百万畝で超多収米(※1)を栽培し、単収八百kgをあげれば八百万トの穀物(飼料米)を生産できる。現在、輸入している飼料用トウモロコシ一千六百万トのうち半分は飼料米で代替できることとなる。農水省の発表によると濃厚飼料自給率は2005年の概算

倍に伸ばせる可能性がある。事実、IRRI(国際稲研究所)の研究者(※2)の報告によると、現在の多収品種ではコメの単収はkg当たり13トが期待できるが、これと改良されたインディカ系統とのハイブリッドでは15トまで伸ばせるとしている。

4 飼料米構想の戦略とビジョン

日本農業の最大の地域資源は水田である。百万畝を超える減反をしているが何のための減反をしてきているのか目的が不明確になってきているのが実態ではないだろうか。かつては食糧制度を堅持するためということが大義名分であったが、1995年に食糧法が廃止されたからは米価の維持が大義名分のようになっている。しかし、減反で米価の低落がふせげているようには見えない。1985年にはコメは3兆8、300億円の産出額があったが、2005年には2兆円を切り1兆9、650億円となっている。消費の減退と米価下落で粗収入としては半減である。このこと自体、稲作農家の財布を貧しくし、稲作に依存している地方ほど打撃を受け地域経済は疲弊してきていることの証である。

そこで、少し大胆であるが筆者が考える飼料米構想を展開してみよう。

(飼料米のビジョン及び目的)

日本の真の食料自給率向上と真の地産地消による日本人の健康維持に寄与することを目的とする。また、循環型農

業の推進を図り自然資本（地力）の増強と、温暖化防止対策の一助とする。コメのエサ化は不可能ではない、日本農業の常識を打ち破り突破口を切り開くものとして飼料米を位置づけ畜産サイドと耕種サイドが連携して取り組みものとする。

（目標）

- 1、国内畜産物のレギュラー（標準）として飼料米を利用する。
 - 2、畜産物の真の自給率50%以上をめざす。
（主原料の2分の1を飼料米に）
 - 3、水田農業との連携強化による畜産の農業としての位置づけの確立と地位の向上。
 - 4、水田100万畝の利用。
 - 5、飼料価格の安定化、畜産物価格の安定化、畜産経営の安定化。
 - 6、稲作経営の安定化。
 - 7、新しい雇用の創出。
 - 8、フードマイレージの実践（地域で飼料米を流通させ、堆肥の水田への還元促進）。
 - 9、自然資本（地力）の増強と地球温暖化の防止。
- （具体的な実現方策）
- 1、超多収の飼料米（デントライズ）の開発。
 - 2、飼料米生産コストの大幅なダウンに向けた栽培法の開発と省力化システムの導入。

きる（堆肥処理の悩みがなくなる）。

⑧自然環境の浄化に寄与できる。

（耕種側）

- ①減反の廃止で水田をフルに活用できる。
 - ②地域農業の所得の増加—就業人口の増加（雇用の拡大）ができる。
 - ③水田の地力増強ができる。
 - ④水田農業の新たなビジネスチャンスが産まれる。
 - ⑤稲作経営の合理化、コストダウンができる。
- などであるが、最大のメリットは水田農業の新たな活路を切り開くものとして「やる気」という意欲が湧いてくることである。

以上のとおりであるが、飼料米生産の大きなメリットは、9、000万トを超える膨大な家畜のふん尿の処理がスムーズに農地還元できることである。「家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」が2004年11月から本格施行されているが、せっかく費用をかけて製造した堆肥も過剰で処理に困っているからである。基本的には堆肥は適正に農地に還元するしかない。客観的にみてこれだけの家畜ふん尿を農地還元するには数百万haの農地が必要である。わが国には化学肥料など投入しなくても充分な量の有機質肥料がある。環境保全の側面からも耕種と畜産の連携は強く求められており、その意味で飼料米の本格生産は合理性を有していると考えられる。

3、大規模水田経営での飼料米生産の実現。

- 4、減反の廃止。
- 5、食用米との分別流通体制の構築。
- 6、試験研究機関、大学等との共同研究態勢の構築。
- 7、堆肥等の水田への施用方法の開発
- 8、飼料米の流通体制及び配合システムの構築
- 9、飼料米を利用した畜産物のマーケティング開発とPR

そして、具体的な飼料米生産に取り組むに当たってスローガンとしては「できるだけ手を抜いて、できるだけまずい米を、できるだけたくさん獲る」を掲げる。

5 飼料米生産と飼料米利用のメリット

次に、飼料米生産で飼料を自給できた場合のメリットはどんなものがあるのか整理してみよう。およそ、次のようなことが可能性として期待できる。

（畜産側）

- ①飼料自給率の向上ができ、目に見える形で食料の安全保障が実現できる。
- ②飼料代のコスト管理が自分で行える（海外の豊凶に左右されない）。
- ③畜産の新たなビジネスチャンスが産まれる。
- ④トウモロコシの輸入代金1600億円を国内の経済発展に振る向けることができる。
- ⑤畜産物価格の安定と適正利益の確保が期待できる。
- ⑦国土の有効利用で、真の意味で循環型農業が確立で

6 最大の課題は飼料米の生産コスト

だが、飼料米を実現するには大きな課題が山積していることも事実である。大きく5つの課題が考えられる。

（1）飼料米の生産コスト↓目標はkg当たり20円

現在、日本の食用米の生産コストはkg当たり300円程度（食用玄米60kg当たり18、000円）である。しかし、飼料として利用するにはkg当たり20円程度（同1、200円）でないと利用が難しい。目標とするコストと現実のコストとの格差は15倍もある。少々のコストダウンでは実現は困難である。従って、飼料米の実現には品種、栽培法、規模において革新的なものを導入する必要がある。

（2）超多収穀物品種の開発↓当面の目標は単収1.2倍

コストダウンの最大の要となるのは単収の飛躍的な増大である。当面は現状の食用米の単収500kg程度から2倍の1、000kg程度を目標にする必要がある。現在のところ単収800kg以上の超多収品種は「タカナリ」「ふくひびき」などの品種があるが、さらに多収の品種を開発・普及していく必要がある。また、ハイブリッドの多収品種についても有望なものを検討していくことが必要である。

（3）栽培法の技術革新と超省力栽培法の導入↓労働時間は10分の1以下

現状でも超多収品種を使えば単収800kgは充分可能である。これによって、コストは半分程度に引き下げることができるが、さらに大幅にコストを引き下げると

めには栽培法の革新が必要となる。これには10a当たりの労働時間が現在30時間であるのを劇的に引き下げ10分の1以下(3時間)に引き下げることが不可欠である。

これはオーストラリアやアメリカのような技術体系を導入すれば技術的には可能である。そのためには、圃場条件、作業体系、機械化体系を根底から見直して省略できるものは徹底して省略し、農作業の外部化(外注)を図っていくことが鍵となる。

(4)大規模な生産体制の構築↓10a単位での作付け

上記の品種、栽培技術の導入と同時に大幅なコストダウンを図るには、作付面積の大規模化が不可欠である。少なくとも10a単位での作付けで実施することが求められる。

(5)飼料米の分別流通態勢の確立↓分別流通の確立

飼料米として流通するものと食用米として流通するのは、無用の混乱を避けるためには流通経路や価格体系において同じコメであっても分けることが求められる。飼料米はできれば食用米とは別の品種であった方が望ましい。例えば「タカナリ」のようなインディカ種の長粒種であれば形が異なるので一目で判別がつけられる。

なお、飼料米を流通する上で規制は食糧管理法が廃止(1995年)されているため現在はないのが実情である。

7不可能を可能にするのは耕畜連携

現段階では飼料米構想はあくまでも構想であって、解決すべき課題が山積している。コスト問題を筆頭に一つも生産力の向上は、本源的DNAでやりがいのある仕事であるからであろう。

8おわりに

日本の場合は、これまでコメの飼料化は古米処理であり膨大な財政負担を伴いながらのコメの飼料化であったため財政当局から厳しく追及されエサ米、飼料米の言葉自体が鬼門とされてきた。しかし、この延長線では飼料米の実現の可能性はない。

新しい発想に基づく戦略的な取り組みが飼料米実現の鍵となることは間違いない。だが何が何としかしてくれるという受け身の姿勢では前進はできない。耕種も畜産サイドお互いに共通目標に向け能動的に取り組んでいくことがこの飼料米構想を実現するエンジンであることを肝に銘じて取り組む必要がある。

また、将来的には耕畜連携からもう一步進めてユーザーである畜産側が主導権を発揮した耕畜統合が必要であることも指摘しておきたい。

本稿ではあえて飼料米について特化して述べたが、飼料イネも同様である。地域資源を生かす産業を創出するという発想で取り組めば必ず突破口は開けてくるはずである。

最後にもう一つ重要な課題を指摘しておかなければならない。それは、飼料米や飼料イネを国民の食糧として位置づけマーケティング開発も同時並行的に取り組む必要があるということである。飼料米や飼料イネを給与し

一つ打開策を探り、突破口を切り開いていくしかないが、その場合鍵となるのは耕種と畜産の連携である。いま、テスト的に飼料米生産のフィージビリティ試験に取り組んでいるが、畜産側は意外と意欲的である。それに呼応するかのよう耕種側も意欲を示してきているのが実態である。はっきりと言って、これまでは耕種と畜産は同じ地域に存在していてもお互いに疎遠であり、交流はほとんどなかったのが実態である。

作目が異なるとお互いの経営センスは全く異なり、共通の話題を探すのにも苦労するがそこはお互い経営者、自分の経営の悩み、苦労話をお互いに腹を割って話していくと自然と話し合いのテーブルができる。互いの悩みが、それぞれのヒントになり解決策が生まれてくるのである。不可能と思われることでも、他の立場からみれば解決策が見いだせることも多い。耕畜連携はそれぞれのサイドが経営者としてのエゴを捨て、どうしたら共通の目標を達成できるか柔軟な発想でお互いの知恵を出し合うことから生まれてくるものと考えられる。

これまでの話し合いの中で、気付いたのは稲作農家の目が輝いていることである。目一杯の多収穫に挑戦してみたいというのは生産者としての本能であり、本能に込めるものとして飼料米に期待しているのである。畜産経営者も多くが飼料米について最初は信用していなかったが、可能性と将来性に気付くと何とかもものにしてくれと期待が高まってきているのが実情である。

また、研究陣も意外と協力的である。研究者にとって作った畜産物にどういう付加価値を付与できるかはマーケティング開発にかかっている。「出口のないところに生産なし」である。

※1 超多収米とは単収800kg以上の品種である。

※2 I R R I (国際稲研究所)のグルデフS.クッシュユ博士は1996年の国際稲研究所日本交流会の講演「稲生産性の壁を破る」の中で、近代的多収イネ品種の可能性について触れている。

集う学友

農大での4年間、仲間へ感謝。

畜産学科 4年

金井 俊憲

平成15年4月に入学してから卒業を控えた今までを思い返してみれば4年間という厚木キャンパスでの時間は楽しい事、つらかった事、多くの笑いと苦勞がたえなかった。

4年間の中で、テスト前に必死に過去問を集めたり、友人の家で朝まで麻雀やったり、サークルで飲み会に行つて、酔い潰れた先輩を担いで歩いたり、収穫祭前に終夜作業で朝まで作業やつて寝ずに講義に出て爆睡したりといろいろ笑つて話せる思い出もいっぱいできた。また、必修の単位落として徹夜で勉強したり、友達と言合いになって喧嘩になりかけたりと苦しい思い出も多かった。

こうやってみると遊んでばかりいたような気もしてくるが、そればかりやっていたら卒業できなかつたかもしれない。私は他にも、教員免許の取得のために勉強したり、家畜繁殖学研究室に入つてからは、家畜人工授精師受精卵移植師の資格取得のために5日連続で研究室に泊り込んで勉強したりと私なりに努力してきた。

もう一つ、大学での思い出に残ることは研究室である。

3年になってから研究室に所属することになるが、私の希望であつた家畜繁殖学研究室は毎年人気があり、希望者の半分が成績の良い方から選ばれ、もう半分がくじでの抽選で、私はもちろんくじのほうである。今思えば、くじでもしはずれを引いていたなら私の大学4年間のうち2年が今とは違うものになっていたはずだ。研究室での思い出は何より強烈で、周りには個性が強い人が大勢いて研究室にいて笑いが絶えない日々だった。先輩たちも、同級の奴らも、後輩たちも皆がいたからこそ、多くの思い出をもらえたと感謝している。

私は卒業後、農業高校の講師として社会人としての一歩を踏み出して行く。つらい事も多いだろうが農大での4年間の思い出がきつと支えになってくれるだろう。最後に私の周りにいてくれた仲間へ感謝を込めて、「ありがとう、またいつか笑つて会おう」。

島民紀行

畜産学科 3年

奥本 将彦

一年前の春休み、長期休暇を利用して小笠原諸島の父島へ一ヶ月間農業実習にかけた。2年の夏休みにボランティア部の合宿で父島が気に入る、島での生活をしたくなつたからだ。2月25日に東京を出港し、約25時間後に父島に着いた。交通手段は船しかなく、まる1日以上かかる、そんな不便なところが魅力的だ。2月なのに気温は20℃近くあり、海水浴もでき、雰囲気も南国で日本語が通じる外国といったような印象だった。父島で一ヶ月間生活するにあたりアパートと原付を借りた。

次の日から農家に行き、農業実習をさせてもらった。朝7時から夕方4時、小笠原の亜熱帯気候の農業をいろいろと学ばせてもらった。この時期が一番忙しいらしく、トウモロコシ、トマトといった夏野菜の収穫が全盛期だった。本土との収穫時期が全く違うのにおどろいた。亜熱帯気候ならではのマンゴー、パッションフルーツといった果物の手入れも学んだ。畜産学科だが農業実習は新鮮でおもしろかった。

父島での生活は暇さえあれば山に登り、海に潜り小笠原でしかみれない景色を楽しんだ。

アパートにはテレビもなく、携帯もつながらなかつたため、それが逆に自然を満喫するいい機会になった。一番の感動は、父島の西にある南島に上陸したことだ。島全体が保護区になっていて、島の景色は別世界だった。行ったことがある人にしかわからない美しさがそこにあった。他にイルカと一緒に泳いだり、ザトウクジラを間近で見たりと普段体験できないことを体験しまくつた一ヶ月だった。

厚木に戻つてからはしばらく呆れることが多かった。終わってみれば短い間だったが、父島島民になれたような気がした。数ヶ月後、農家の方から収穫したパッションフルーツや野菜が届いた。父島での生活を思い出しながらいただき、機会があればまた行こうと思った。

最後に、お世話になった父島の人々、実習にあたり連絡をとってくれた宮田先生、充実した一ヶ月間をありがとうございました。

「子供っぽさ」を忘れない大人へ

畜産学科 2年

遠藤 由美

二〇〇七年一月八日、私は成人式を迎えた。もう半年以上前に二十歳にはなっていたが、これで私も完全に「大人」である。

成人式だけではなく、周囲には今年度一年間を通して、「大人になれ」と例年以上に何度も言われた。当然である。未成年だった時のように少年法は適用されないし、年金も、払うのか学生なので免除にしようか考えなければならぬ。両親に頼ってばかりいないで、そろそろ就職をどうするか、経済的にも自立するにはどうしたらいいのかを本気で考えなければいけない。そしてそこには常に一人の人間としての「責任」がついてまわる。無謀な事をしてもある程度まで周囲の「責任を持つ大人」が何とかしてくれる、そんな時間は終わったのである。

この様に考えていくと、子供であるということはこの年になって恥ずかしいことであるように思えてくる。しかし最近私は、ある意味で子供を見習うべきだ、と考えるようになった。

私は現在、地元で祭囃子と獅子舞を子供達に教えている。週に二回ある稽古の時、彼女らはすぐに夢中になる。

大学生活、始めの一步

畜産学科 1年

安部 佑美

農大に入学して一年が経ちました。本当にあつという間の一年でした。

「動物に関わることを学びたい」

そんな気持ちで、数少ない畜産学科のある大学の中から農大を選びました。しかし、これといって将来の夢などは決まっていませんでしたし、畜産学科で何をどのように学ぶのかは全然わかりませんでした。

そんな中で、富士農場での畜産実習がありました。三泊四日の間、朝早くから起きて牛舎の掃除をしたり、家畜のスケッチ、豚の去勢や鶏の予防注射を行いました。夜は一日ごとにレポートを書き、その日に学んだことをまとめていきました。農場に行くのは初めてだけど、何もかもが新鮮でした。同時に、畜産とはどういうものなのかを知る良い機会になりました。

大学での授業も、難しいが、面白いものばかりです。家畜論や畜産概論などの、いかにも畜産学科らしいものや、動物栄養学や動物生体機構学といったものまで幅広く学びました。試験は大変だが、とてもやりがいのある勉強ばかりです。

また、分からないことに対しては「なんで？」と素直に言い、納得する答えが見つからなければ自分で一生懸命考えます。私がいい加減な事を言えばそれをすぐに見抜き、注意されることもある。それが、彼女らからすればごく当たり前のことなのである。

確かにずっと子供でいることは好ましくないことである。しかし、子供特有の良い意味での純粹さや素直さというものは、なんとなく大人になってしまった今の私達にとって非常に大切なものではないかと思う。

二〇〇七年度からは研究室での活動が始まる。その中でも、それでももちろん他の場所でも、私は良い意味での「子供っぽさ」を忘れない、しかし一人の大人としての責任も持つ、そんな大人になっていきたい。

畜産学科というと、よく周りから

「実家は農家なの？」

「将来は農業をやるの？」

と聞かれますが、最初も私も、一体この先はどうなるんだろうと不安にもなりました。しかし、実際に一年間勉強してみても考えが変わりました。畜産には、家畜を育てる人もいれば、その餌を作る人もいます。生態を研究する人や病気を研究する人がいます。色々な分野の人が集まって、畜産が成り立っているんだなあと思いました。将来、自分がどの分野に従事していきたいか。この大学生活の中でじっくり考えたいと思います。

平成17年度収支決算報告

平成17年6月1日～平成18年5月31日

I. 一般会計

収入の部

(単位:円)

科 目	予算額	決算額	差 額	備 考
会 費				
新入生(18年)	1,800,000	260,000	1,540,000	10,000円×26名
編入生(18年)	127,500	17,500	110,000	5,000円×2名+7,500円×1名
過年度分(17年)	3,177,500	2,225,000	952,500	10,000円×214名+5,000円×17名
雑 収 入	10	24,000	△23,990	※1)
当期収入合計(A)	5,105,010	2,526,500	2,578,510	
前期繰越収支差額	600,265	600,265	0	
収入合計(B)	5,705,275	3,126,765	2,578,510	

※1) 祝儀(第6回収穫祭実行委員会 5,000円×2 宣伝隊本部 2,000円×2 ラウンドハウス・梅沢賢治 5,000円×2)

支出の部

(単位:円)

科 目	予算額	決算額	差 額	備 考
収 穫 祭 援 助 費	700,000	700,000	0	特別会計へ
ふじみの印刷費	430,000	428,610	1,390	1,300部
卒業祝賀会費	200,000	121,498	78,502	
卒業記念費	400,000	132,678	267,322	270個製作
新入生歓迎会費	150,000	138,441	11,559	
消耗品費	30,000	2,778	27,222	
通信運搬費	150,000	27,105	122,865	
雑 費	70,000	30,055	39,945	
予 備 費	230,000	0	230,000	
当期支出合計(C)	2,360,000	1,581,165	778,835	
当期収支差額(A)-(C)	2,745,010	945,335	1,799,675	
次期繰越収支差額(B)-(C)	3,345,275	1,545,600	1,799,675	

残高証明	郵便局	¥1,486,144
	三井住友銀行(畜友会)	¥59,456
	合計	¥1,545,600

平成18年度畜友会事業報告

平成18年6月1日～平成19年5月31日

畜友会だより

平成18年

- 5月27日
～6月1日 厚木キャンパス春季スポーツ大会参加
- 6月22日 平成18年度畜友会定期総会
- 7月中旬 一年生対象収穫祭説明会(授業終了後)
- 10月23日 第7回厚木キャンパス収穫祭 及び
第115回体育祭畜産学科統一本部本部開き(於 けやき)
- 11月3日 第7回厚木キャンパス収穫祭前夜祭
- 11月4日 第7回厚木キャンパス収穫祭
～5日 (家畜苑、研究棟アート、特別企画、宣伝隊)
- 11月6日 第115回体育祭参加(於 世田谷キャンパス)
- 11月16日 第7回厚木キャンパス収穫祭 及び
第115回体育祭畜産学科統一本部慰労会
(於 食堂・けやき)
- 12月18日
～21日 厚木キャンパス冬季スポーツ大会参加
- 平成19年
- 3月20日 畜友会誌「ふじみの」43号発行
- 3月21日 卒業祝賀会・卒業記念品贈呈
- 4月下旬 新入生歓迎会(於 食堂・けやき)

平成18年度畜友会予算

平成18年6月1日～平成19年5月31日

I. 一般会計予算(案)

収入の部

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 額	備 考
会 費				
新入生(H19年)	1,800,000	1,800,000	0	
編入生(H19年)	50,000	127,500	△77,500	
通年度分(H18年)	2,885,000	3,177,500	△292,500	※1)
雑 収 入	0	10	△10	
当期収入合計(A)	4,735,000	5,105,010	△370,010	
前期繰越収支差額	1,545,600	600,265	945,335	
収入合計(B)	6,280,600	5,705,275	575,325	

※1) 1年生……………10,000円×197名
 2年生……………10,000円×33名+7,500円×1名
 3年生……………10,000円×36名+5,000円×10名
 4年生……………10,000円×11名+5,000円×7名+7,500円×3名

支出の部

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 額	備 考
収 穫 祭 援 助 費	1,000,000	700,000	300,000	
ふじみの印刷費	430,000	430,000	0	
卒業祝賀会費	180,000	200,000	△20,000	
卒業記念品費	400,000	400,000	0	
新入生歓迎会費	150,000	150,000	0	
消 耗 品 費	30,000	30,000	0	
通 信 運 搬 費	100,000	150,000	△50,000	
雑 費	50,000	70,000	△20,000	
予 備 費	230,000	230,000	0	
当期支出合計(C)	2,570,000	2,360,000	210,000	
当期収支差額(A)-(C)	2,165,000	2,745,010	△580,010	
次期繰越収支差額(B)-(C)	3,710,600	3,345,275	365,325	

特別会計収支決算報告

平成16年6月1日～平成17年5月31日

II. 収穫祭特別会計

収入の部

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 額
一 般 会 計 より	700,000	700,000	0
雑 収 入	10	0	10
当期収入合計(A)	700,010	700,000	10
前期繰越収支差額	199,651	199,651	0
収入合計(B)	899,661	899,651	10

支出の部

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 額
統 一 本 部	400,000	379,490	20,510
特 別 企 画	0	0	0
体 育 祭	70,000	70,000	0
宣 伝 隊	150,000	133,105	16,895
装 飾	50,000	44,503	5,497
家 畜 苑	130,000	94,615	35,385
予 備 費	45,000	588	44,412
当期支出合計(C)	845,000	722,301	122,699
当期収支(A)-(C)	△144,990	△22,301	△122,689
次期繰越収支差額(B)-(C)	54,661	177,350	△122,689

上記のとおり報告する。
平成18年6月15日

畜友会会長 渡邊 忠 男 ㊞

上記に相違ないことを認める。
平成18年6月15日

平成17年畜友会監査委員

桑山 岳 人 村上 覚 史
金井 俊 憲 西岡 莊 平

監査報告書

畜友会会則第9章、第29条及び30条の規定に基づいて平成18年6月15日に平成17年度業務及び会計監査を実施致しました。

事業報告、通帳、出納長及び領収書を精査した結果、適切に遂行されたことを認める。

平成18年度畜友会役員

平成18年6月1日～平成19年5月31日

役職	氏名	研究室
会長	渡邊 忠男	家畜衛生学研究室
副会長	池田 周平	家畜飼養学研究室
副会長	花田 博文	家畜育種学研究室

・執行委員

委員長	3年 須藤 真史	家畜生理学研究室
副委員長	3年 河合 大典	家畜飼養学研究室
	2年 野口 桂三	畜産マネジメント研究室
書記	3年 神蔵 美穂	家畜繁殖学研究室
	2年 松山 友美	家畜繁殖学研究室
会計	3年 増田 翔	家畜育種学研究室
	2年 矢野 抄子	野生動物学研究室
渉外	3年 高野 大智	家畜育種学研究室
	2年 石川 怜	家畜飼養学研究室
企画	3年 長壁 治弘	家畜繁殖学研究室
	2年 山縣 瑞恵	野生動物学研究室
庶務	3年 相馬 雄介	畜産物利用学研究室
	2年 峯野 直也	家畜育種学研究室
編集	3年 谷口 絵梨	野生動物学研究室
	2年 久保田 朋美	家畜飼養学研究室
監事	桑山 岳人	家畜繁殖学研究室
	村上 覚史	家畜衛生学研究室
	3年 西岡 莊平	家畜育種学研究室
	2年 岡 泰平	家畜飼養学研究室

特別会計予算

平成17年6月1日～平成18年5月31日

II. 収穫祭特別会計予算(案)

畜友会援助費

収入の部 (単位:円)			
科目	予算額	前年度予算額	差額
一般会計より	1,000,000	700,000	300,000
雑収入	0	10 ^{*1)}	△10
畜産学科助成金			
当期収入合計(A)	1,000,000	700,010	299,990
前期繰越収支差額	177,350	199,651	△22,301
収入合計(B)	1,177,350	899,661	277,689

支出の部 (単位:円)			
科目	予算額	前年度予算額	差額
統一本部	700,000	400,000	300,000
特別企画	0	0	0
体育祭	70,000	70,000	0
宣伝隊	150,000	150,000	0
装飾	50,000	50,000	0
家畜苑	130,000	130,000	0
予備費	45,000	45,000	0
当期収支合計(C)	1,145,000	845,000	300,000
当期収支差額(A)-(C)	△145,000	△144,990	△10
次期繰越収支差額(B)-(C)	32,350	54,661	△22,311

農友会学科助成金

収入の部 (単位:円)			
科目	予算額	前年度予算額	差額
一般会計より			
雑収入			
畜産学科助成金	1,630,000	1,610,000	0
当期収入合計(A)	1,630,000	1,610,000	0
前期繰越収支差額			
収入合計(B)			

内訳 (単位:円)			
科目	第7回予算	第6回予算	差額
学科助成金	計650,000	計610,000	40,000
神輿代	130,000	130,000	0
パネル代	100,000	100,000	0
応援合戦衣装代	130,000	60,000	70,000
事務費	40,000	20,000	20,000
記録費	50,000	50,000	0
交通費	200,000	250,000	△50,000
学内装飾費	計150,000	計150,000	0
家畜苑費	計830,000	計850,000	△20,000
鋼管代	190,000	210,000	△20,000
運搬代	380,000	380,000	0
装飾代	260,000	260,000	0
合計	1,630,000	1,610,000	20,000

第七回厚木キャンパス収穫祭・第一一五回体育祭 事業報告及び結果報告

〔事業報告〕 統一本部

畜産学科統一本部の第7回収穫祭での活動は、収穫祭宣伝活動、研究棟アート、特別企画、家畜苑、櫓装飾、体育祭を行いました。

統一本部(委員長、副委員長)の活動としては、先生方と連絡を取り畜産学科統一本部の各部門及び第7回厚木キャンパス収穫祭実行本部、農学科統一本部、バイオセラピー学科統一本部、世田谷キャンパス13学科統一本部と連絡を取り合い、また畜産学科統一本部をまとめ7回目となる厚木キャンパス収穫祭、第115回体育祭を成功させようと最後まで全力疾走しました。本年度は、良い雰囲気の中作業を行い、その思いが天にも届き収穫祭、体育祭当日の3日間とも天候に左右されることなく、来場者数も昨年を上回り無事成功させることができました。これも、皆様方のご協力があった成功だと思えます。

来年度は第8回を迎えるに当たり、本年度学んだことを生かしつつ素晴らしい伝統を背負い、新たなメンバーで新たな目標に向かって一致団結し、ケガなく活動し、いつてほしいと思えます。



特別企画

今年も多くの学生や地域の方々に参加し、楽しんでいただけるようなステージを特別企画本部が一丸となり作り上げました。

今年の収穫祭では、変身企画の「ミス・ミスターになんか負けねえぞ!」や抽選会企画の「BIGchance」キワードを集めて賞品ゲット」等、第7回収穫祭ならではの新しい企画が生まれ、さらに、農大らしさを出した授業企画「アロマつくすHAI!」ではアロマセラピーについての講義をし、「3ちゃんねる」理科の時間」ではアイス作りをやり、来場者の皆さんに楽しんでいただくことができました。

そして、一般の方々も華やかなダンスや美しい歌声を披露していた「こんなのどうでshow☆」や子供に大人気の「バレーンだよ全員集合」、家族が一つとなって参加する「仲良し親子さん いらっしやうい!」、農大ならではの企画を出題する「農大まるごと×クイズ」等、恒例となった企画でも来場者の皆さんに参加していただきました。

また、よさこいソーラン同好会による「VIVA YOSAKOI」つきぬけちゃえよ!非日常」では華麗な演舞を、また軽音楽同好会による「らいぶ☆ふえすた2006」ではすばらしい演奏を披露してもらいました。

学生メインの企画では、サークル対抗のゲーム企画「くるくるPonwithUA」、農大のミス・ミスターを決める「NBC」Nodai Beauty Cup」、女装コンテストの「美女は野獣」などの企画をやり、大いに盛り上がりました。

宣伝隊

宣伝隊。それは、東京農工大学の収穫祭を知ってもらうために祭りや各駅などに行き宣伝活動を行う部門です。宣伝隊には衣装があり、「大根」と厚木のシンボル「鮎」の柄が入った浴衣に膳脂色の法被を羽織り、足袋を履いています。そして宣伝活動では収穫祭を知ってもらうために声を出しビラの配布を行います。

主に宣伝活動期間は九月下旬から収穫祭までで、その間に行われる祭りや各駅に行きます。最初の宣伝活動は、八月に行われたあつぎ鮎まつりのDANBEパレードです。DANBEパレードは世田谷の宣伝隊と合同で行われ、農大名物青山ほとりを踊りました。ここではうちわと青山ほとりの最後に大根の無料配布を行い、多くの方々から「収穫祭に行くから」という声を聞きとても良い宣伝活動になりました。十月中旬には、全学応援団によるリーダー公開を本厚木駅前とSATY前で行いました。

そのほかにも新しい宣伝活動を行いました。それはマスメディアの導入です。今回は、朝日新聞と一緒に収穫祭のチラシを入れる事で宣伝活



動では届かない範囲を補うようにしました。

もしかしたら皆様のお宅へ届いたかもしれませんが、今年から新しく変わったものもあります。幼稚園、保育所、小学校によるお絵かきを「農大ちびっ子アトギヤラリー」に改名し、より多くの子供たちが参加できるようにになりました。



神輿では八月中旬から製作を初め厚木パレードに挑みました。昨年の厚木パレードは、雨天で中止になり神輿を見せる場が少なかったのですが今年には天候にも恵まれ成功させることができました。前回できなかった分、今回多くの方々に収穫祭を知ってもらうことができました。また、第118回体育祭では全学科中畜産学科神輿の部第三位というすばらしい成績を収めることができました。これは、前回の体育祭と比べ順位をひとつ上げよい結果を残すことができました。来年度の収穫祭は今年よりも更に来場者数が増えるよう務めたいです。

体育祭

体育祭は毎年収穫祭の後に世田谷キャンパスグラウンドにて行われます。当日は、16学科揃っての入場行進で始まり、大玉転がし、綱引き、先生頑張って、玉入れ、各学科対抗リレーなど、様々な競技が行われます。

競技の部、部活対抗リレーでは、各部活の特徴を活かした個性のあるパフォーマンスをしながら走り、とても盛り上がります。

また、体育祭の目玉の一つとも言える応援の部というものは、互いの学科を応援し合う、応援合戦です。日々練習を重ねて望む各学科の踊りは、とても見応えがあります。我が畜産学科は応援合戦のために、体育館を借り、学生会館の一室を借り、時には外で：昼夜を問わず踊りの練習をしています。今年の畜産学科の応援合戦のテーマは「闘牛」でした。踊りを見てくださる方々を驚かせたい！と、牛を登場させてみました。そして、応援の部では第5位に、更にユーモア賞が改められた「オリジナリティ賞」をいただきました。

今年の総合順位は第4位ではありませんが、先生方を始めとする畜産学科の方々の大健闘により、競技の部では第2位を納めることができました。

体育祭は学内の皆様のご協力があったからこそ成り立ち、盛り上がるものです。来年は今年以上に素晴らしいものが創り上げられるのではないのでしょうか。



櫓装飾

「櫓」とは、体育祭開催中に使われる応援席のようなものです。大きさは高さ約5m 50cm 横幅約9m 奥行き約3mの巨大な作品です。

本年度、畜産学科の櫓は「闘牛」です。体半分を立体にし、頭が上下に動く構造になっています。

本体が大きいので迫力があり、さらに本物に近付けるために体の表面を人工芝で覆いスプレーで色をつけ、こだわりあるいい作品に仕上がりました。

応援席の下には「畜産笑隊夢」笑顔で夢見る大舞隊という意味を込めた文字を色と形を工夫し、かわいく仕上げました。この作品は組み立て、様々な部分でみんなの協力のおかげで完成することができました。結果の方は残念ながら上位に入ることができませんでした。しかし、その過程の中でたくさんの人に助けられ、仲良くなり、人との「絆」の大切さを学ぶことができました。それは私にとって結果よりもとても価値のあるものになりました。



研究棟アート

研究棟アートとは、研究棟の壁一面に巨大な絵を掲げ、収穫祭が間近であることを知らせ、より多くの人に来ていただきたいという宣伝のために作られたものです。

この絵は縦15メートル横15メートルの白い布を11本繋ぎ合わせ、大きな1枚の絵画を作り上げました。その大きさは約14平方メートル、厚木市文化会館からでも確認できるほどの大きさです。この絵のように、みんなで力を繋ぎ合わせ、1つの大きな収穫祭を作り上げていこうという願いもこめられています。

今年バイオセラピー学科が新設され、その宣伝も兼ねて各学科を象徴した絵を描くため3枚にしました。農学科を象徴したものととして、収穫祭の開催を祝したくさんの紅白の花を咲かせ、畜産学科は東京農大の繁栄に向かって突っ走って行くように、闘牛を農大色の緑色をベースにして描きました。そして、新設のバイオセラピー学科は若くポップなイメージだったので上記の二学科の絵とはタッチを全く変え、馬や犬をかわいらしく描きました。



今年の作業は例年よりも早く開始し、多くの方々に協力していただき、本祭1週間前から絵も掲げる事ができ、よく多くの方々に収穫祭の知らせをお届けする事が出来ました。また、このアートを通してみんなの力が1つとなり、収穫祭の成功への祈りやこの収穫祭が全て手作りの文化祭であるという事も皆様にお伝え出来たことと思います。

家畜苑

家畜苑とはただ単に可愛い動物たちの展示ではなく、経済動物として利用しているということをみな様に理解していただく場所です。家畜苑に来てくれる方は比較的小さい子供でもわかるように絵を使って各家畜ごとにまとめたり、今年度はクイズ&スタンプラリーを作り、楽しみながら覚えてもらえる工夫をしました。また、鶏の孵化の展示やヒヨコに触れるコーナー、牛のブラッシング、リヤマに乗れるといった場を設け、普段ではなかなかかふれる事の出来ない「家畜」と共に「命」を感じてもらえるようにしました。大人の方々にもただ肉や乳や卵などを利用しているということだけでなく、どのような経緯でみな様の手に届くのか知っていただくために産まれてから出荷までの期間や経済サイクルなどを文展的にまとめました。

家畜苑がきっかけとなり、来場者の方々に「家畜」というものを少しでも考えていただけたら良いと思います。そして、「命」と引き換えに私たちの生活が成り立っているということを忘れないで欲しいです。



【結果発表】

体育祭

総合順位	第4位
競技の部	第2位
台風の目	第3位
各学科対抗リレー(女子の部)	第1位
櫓装飾の部	第10位
応援の部	第5位
(オリジナリティ受賞)	
神輿の部	第3位

東京農業大学農学部畜産学科

“畜友会”会則

第一章 総則

- 第一条 本会は東京農業大学農学部畜産学科畜友会と称する。
- 第二条 本会は事務局を東京農業大学農学部畜産学科内に置く。
- 第三条 本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。

第二章 業務

- 第四条 本会は第三条の目的達成のために次の事業を行う。
 - (1) 会員相互の親睦
 - (2) 講習会、研修会及び研究会発表の開催
 - (3) 機関紙「ふじみの」の発刊
 - (4) 大学行事(収穫祭等)への参加
 - (5) その他第三条に付帯する業務

第三章 会員及び役員

- 第五条 本会の会員は次の通りとする。
 - (1) 正会員 畜産学科の学生
 - (2) 特別会員 畜産学科教職員ならびに大学院生

第六条

- (3) 名誉会員 役員会の推薦を受け、総会の承認を得た者。
- 本会は次の役員を置く。
 - (1) 会長 1名
 - (2) 副会長 2名
 - (3) 執行委員
 - 委員長 1名
 - 副委員長 2名
 - 書記 2名
 - 書記 2名
 - 会計 2名
 - 渉外 2名
 - 企画 2名
 - 庶務 2名
 - 編集 2名
 - 監事 4名

第七条

- (1) 会長は会を代表し、会務を総理する。副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代理とする。また1名は総務を他の1名は会計を分担する。
- (2) 委員長は会長の指示を受け、執行委員会を統括する。副委員長は委員長を補佐し、委員長不在の時はその代理をする。各委員長はそれぞれの会務を分担執行する。

第八 条

(1) 本会には連絡委員を置く。

(2) 連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡委員会での意見を反映するとともに執行委員会の決定事項を会員に伝達する。

第九 条

役員および連絡委員の選出および任期
(1) 会長は畜産学科長がこの任にあたる。

副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。

(2) 執行委員は、執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、ほかの1名を2年次生より選出するものとする。

尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事は他の役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

(3) 執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。

(4) 連絡委員は、各学科(1、2年次)および各研究室(3、4年次)で協議のうえ選出する。また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第四章 総会

第十 条

(1) 総会は定期総会とする。

(2) 総会は正会員および特別会員を持って構成され、本会の最高意思決定機関とする。

(3) 定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。

(4) 臨時総会は会長が必要と認めた場合ならびに正会員および特別会員総数の四分の一以上の同意を得て開催目的および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができ。

第十一 条

総会開催は七日以前に公示しなければならぬ。

第十二 条

(1) 総会は正会員および特別会員の四分の一以上の出席により成立する。

(2) 委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。

委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員の五分の一を上限とする。
(3) 委任状の検査は執行委員が行う。
定期総会は次の事項を決議する。

第十三 条

① 前年度の事業報告および収支決算報告

② 次年度の役員

③ 次年度の事業計画および収支予算

④ 会則の改正

⑤ その他

第十四 条

総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第二十二 条

長は会長および副会長に文章で必ず報告する。連絡委員会は委員長が総会前に必ず招集開催する。また、委員長が必要を認めた場合に開催することができる。

第十五 条

議長は書記2名と議事録署名人2名を選出する。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六 条

総会の議決は出席者の過半数によって議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七 条

総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者には委任状は含まない。

第二十三 条

本会の事業年度および会計年度は六月一日に始まり、翌年の五月末日までとする。

第五章 執行委員会および連絡委員会

第十八 条

(1) 第六条(3)の執行委員会は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。

第六章 会計

第二十四 条

本会の運営は会費および寄付金ならびにその他の収入を以ってこれにあて。

第十九 条

執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が勤め、出席者の過半数より可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十五 条

(1) 会費は年間二、五〇〇円とし、入学時に一括して一〇、〇〇〇円を納入する。編入・転学科学学生は学年に応じた金額を一括納入する。但し、一度納入した会費は返金しない。しかし、入学取り消しの場合はその限りではない。

第二十 条

執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十一 条

執行委員会で議決された事項について、委員

第二十六条 (2)会費は会長および委員長連名で毎年4月に入学対象者に対して請求するものとする。本会の会計は、所定の形式に従って処理し、決算はすべて監事の監査を経なければならない。

第七章 機関紙「ふじみの」編集発行

第二十七条 (1)第四条(3)の目的達成の為に編集委員会を設ける。
(2)編集委員会の委員は執行委員および正委員の中から若干名選出する。
(3)編集委員会の責任者は編集委員のうち1名が担当する。
(4)編集委員会は機関紙「ふじみの」の編集発行を責任もって執行する。

第八章 大学行事への参加

第二十八条 (1)第四条(4)の目的達成の為に必要に応じて委員会を設ける。
(2)設けた委員会は本会の目的達成の為に執行委員会の意思を受け運営する。尚、内規は別に定める。
(3)委員会の責任者は執行委員の内1名が必ず当たる。構成員については、正会員の中から必要に応じた人数を選出する。

第九章 監査

第二十九条 監事は本会が目的達成の為、円滑に業務を執行しているか否かを監査する。
第三十条 監事は前条目的の為業務監査および会計監査を行い、その結果を総会において報告する。尚、必要と認められた場合は臨時監査することができる。

第十章 付則

第三十一条 本規定の最終解釈は役員会で行う。
第三十二条 本会則は前規約を改正し、平成一〇年二月二〇日よりこれを試行する。

畜友会収穫祭内規

第一章 目的

第一条 本内規は東京農業大学農学部畜産学科畜友会会則（以後畜友会会則と称す）第28条によりこれを定める。
第二条 収穫祭は東京農業大学農友会厚木支部収穫祭規定第1条および第9条に基づく収穫祭に参加する。

第二章 組織および役員

第三条 収穫祭を円滑に運営するため畜産学科収穫祭実行委員会（以後実行委員会と称す）として次の組織を置く（以後6本部と称す）。
1、統一本部
2、宣伝隊実行本部
3、特別企画実行本部
4、学内装飾実行本部
5、家畜苑実行本部
6、体育祭実行本部
第四条 実行委員会に次の役員を置き、会務を処理する。

会長	1名
副会長	2名
統一本部顧問	若干名

第六条

(1)会長は会務を統括する。副会長は会長を補助し、会長に事故があるときはこれを代理する。
(2)統一本部顧問および各実行本部顧問は統一本部および各実行本部の指導にあたる。

第五条

統一本部委員長	1名
統一本部副委員長	1名
統一本部会計	1名
各実行本部顧問	若干名
各実行本部責任者	各1名
各実行本部副責任者	各1名
各実行本部会計	各1名

(1)会長は畜友会会長がこれにあたる。副会長は畜友会副会長がこれにあたる。
(2)統一本部顧問および各実行本部顧問は畜産学科教職員より会長がこれを委嘱する。
(3)統一本部委員長は畜友会執行委員がこれにあたる。統一本部副委員長、統一本部会計、各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部会計は統一本部委員長が畜友会執行委員会の承認を得た後、会長および各実行本部顧問の了承を得てから委嘱する。

(3)統一本部委員長は各実行本部を統括する。統一本部副委員長は統一本部委員長を補佐すると共に統一本部担当者として協力して各本部の円滑な運営活動を助ける。

(4)各実行本部責任者は各実行本部の運営を担当する。各実行本部副責任者は各実行本部責任者を補佐すると共に各実行本部担当者として協力して円滑な運営・実施にあたる。

第七條 実行委員会の機関として6本部会議および各実行本部会議を置く。

(1)6本部会議は会長、副会長、各実行本部顧問、統一本部委員長、統一本部副委員長および統一本部会計ならびに各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部会計で構成し、畜産学科収穫祭全体の重要事項を審議する。6本部会議の議長は統一本部委員長がこれを務める。

(2)各実行本部会議は統一本部委員長、統一本部副委員長、各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部担当者で構成し、各実行本部の運営活動を審議する。各実行本部会議の議長は各実行本部責任者がこれを務める。

第三章 会計

第八條 収穫祭の会計は特別会計として畜友会収穫祭

援助費および農友会厚木支部収穫祭助成金ならびにその他の収入をもってこれにあてる。

第九條 予算は畜友会執行委員会で編成し畜友会定期総会で承認を得る。

第十條 会計処理は別に定める。「会計処理取扱細則」によって処理する。

第十一條 決算書は統一本部がこれを作成し、畜友会執行委員会に諮り、畜友会監査を受けた後、畜友会定期総会で承認を得る。

第四章 付則

第十二條 本内規の改正は6本部会議で原案を作成し、畜友会執行委員会に諮った後、畜友会定期総会で承認を得る。

第十三條 本内規は平成15年6月1日よりこれを実施する。

各部門委員長より

最期に・・・。

統一本部委員長

3年 須藤 真史

畜産学科統一本部に参加してもう3年。もう3年。もう3年になっていました。そして気がついたら統一委員長も終わりになってしまいました。これまでの3年間は自分にとってもの凄く貴重な3年間でした。収穫祭準備期間は生活の全てを統一本部の仲間「ヒデ、リョウ、キョウヘイ、ハル君、チョコ、ソーマ、ユウコ、Dち、エリ、ダイテン、ソウちゃん、ヒロシ、1君、ミホ、GO君、ミチヨ、みを、2年生、1年生」と過ごした日々は楽しく、充実した毎日だった。

しかし、楽しい事だけでなく、苦しい時、辛い時、ムカつく時が時にはあって、それでも話を聞き、納得し合い、素晴らしい物を作り上げられました。今一番思うのはこの統一本部がなかったら、こんな素晴らしい仲間たちに出会えなかったら、自分はフヌケのアンポンタンになっていたと思う。(自己評価だけど：笑)

統一本部は収穫祭を作り上げ、盛り上げるだけでなく、人と人との繋がりを十二分に味わえる貴重な場所、一生であるかないかの体験ができました。本当にいい思い出が

残ったと思います。この体験は必ず社会の中で役に立ち、自分のためになると思います。

第7回収穫祭の統一本部委員長をやってみて、本当の本当に幸せでした。まだまだ活動をやりたいです！辞めたくありません！が、もう無理です。だから今度は第8回収穫祭を見守る立場で楽しみにして、後輩たちに自分たちよりも高みを目指してもらいたいです。

最期に・・・畜産学科の皆様！畜産学科の先生方！自分を育ててくれた先輩方！そしてなにより、自分を支えてくれた仲間たち！

本当にありがとうございました!!!



MAKE YOUR SMILE

特別企画委員長

3年 福山 裕史

自分にとつて、2006年は大学生生活の中でとても濃い1年間でした。第7回収穫祭特別企画本部の会議が始まったのは2月、総務・農学そして今年からはバイオセラピーが途中から参加し個性の強い面々でトッキーズは始動しました。「去年でもなく来年でもない、今年らしいステージ」を造ろうと、去年に無いもの、去年とは違うモノを造るためにどうすれば良いのかな？新しく入ってきた2年生にはどうやってトッキの仕事に分かってもらえるか？委員長としてやっていけるのか？不安な事はいくらでもありました。実際に研究室の当番・実験を抱え時間はいくらあっても足りないという時もありました。でも、それでもトッキを最後まで楽しく出来たのは特別企画が楽しいこと、統一のメンバーが本当に楽しくて暖かい人達だったからだと思います。そして、何より相手の相馬雄介・峯野直也・加藤充浩・加藤麻衣と一緒に笑ったり、怒ったり、時に



は泣いたかも知れないけど、頑張って作りあげたステージに参加してくれた人・それを見ていた人達の笑顔はかけがえの無いものでした。

そして、2007年の収穫祭を造る後輩へ。確かに不安はあります。それは毎年先輩から後輩に法被を渡した時から付いて回るものです。でも、きっと今年にはなかったステージを造ってくれるはずです。だって、1人1人自分たちにはなかったモノを持っていると思うからです。誰にも真似できない個性がね。総務・農学・バイオセラピーの皆が集まれば、やれるはずですよ。

相馬へ。本当にありがとう。相方が相馬で本当に良かったです。きっと相馬以外の誰かだったら、こんなに楽しい時間を作れなかったと思う。2年間ありがとうございました！

また、企画に参加していただいた、先生方、各団体、各研究室の皆様ありがとうございました。

最後になりましたが、第7回収穫祭特別企画本部を支えて頂いた参与の先生方、ならびに収穫祭実行本部、農友会各支部の皆さんにこの場をお借りして御礼申し上げます。

目指せ「5万人!!」

宣伝隊長

3年 高野 大智

先輩から法被を渡され、宣伝隊長に任命されてから1年が経ちました。この1年はとても早く感じ、密度の濃い1年だったと思います。

2月から宣伝隊のメンバーで話し合いが始まり、遅くなるときは夜の10時に学生会館が閉まるまで話し合いをしました。今年のピラには何をつけるか？この配布物で予算内に収まるのだろうか？新しい宣伝活動場所を増やすかどうか？どのように宣伝したら子供からお年寄りまで幅広い世代に収穫祭に来てもらえるのか。話し合うことは山のようでありました。

個人的に第7回収穫祭は、来場者数5万人という目標を掲げていました。前年度の来場者数は3万5千人。少し無理な目標な気がしますが、目標は大きく行きたかったのだ。この目標目指して頑張りました。この目標を達成するには、今年は去年と比較して何を新しくできるかという事です。

今年新しく取り組んだ事としては、新聞の折り込みチラシとして農大のチラシを入れました。それから、伊勢原道灌祭りや伊勢原畜産祭りといった地域の祭りにも沢山参加しました。また、配布物に農大で作ったポプリを配るなど農大ならではの物を配布しました。



宣伝活動でピラを配っている時、おばちゃんに「絶対収穫祭行くからね!」、「毎年楽しくて、行つてよ!」という言葉がかけられると不思議と嬉しくなります。町の人達との距離を近く感じる事が出来て、宣伝活動をやっていて良かったと改めて実感します。

さて今年の来場者数は、4万5千人となりました。

目標には届きませんでしたが達成感で一杯です。僕がここまで頑張ってきたのも同期の仲間、後輩の助けによるものです。龍、美穂、絵梨今まで頼りない隊長だったけど支えてくれてありがとう。他部門のみんな、宣伝活動に協力してくれて本当に助かりました。彩乃へ。来年、畜産学科宣伝隊1人になるけど、うまく後輩をリードして、他学科とも協力し、また新たな事にチャレンジしてみてください。

畜産学科統一本部で過ごした3年間は、これからもずっと僕の宝です。

最後になりましたが、第7回収穫祭宣伝隊を支えて下さった参与の先生方、並びに収穫祭実行本部、農友会各部の皆さんにこの場を借りて御礼申し上げます。

神輿

神輿隊長

3年 西岡 莊平

神輿小屋での風景、厚木パレードの活気、体育祭の応援合戦、キャンプファイアの炎。今でも目を閉じれば思い出す。

自分にとって、畜産学科統一本部のメンバーと過ごした時間は宝物だ。中でも自分が携わった神輿に関しては思いが強い。

自分が神輿の責任者になったのは第114回体育祭の後の交代式。憧れだった「粹」法被を受け継いだ時は本当にうれしかった。しかし、うれしさの反面、重圧もあった。畜産の神輿は代々非常に完成度が高い。先輩方の作品を見ているうちに、自分にこれほどの完成度の高いものが作れるのだろうか。本当に自分が責任者でよかったのか。などと不安に押しつぶされそうになった。それでも何とか乗り越えられたのは、励まし、支えてくれた仲間、後輩がいてくれたおかげだと思う。

今年の神輿は本当にみんなの力なしではできなかった。制作開始は8月末。まだ夏休みにもかかわらず、手伝いに来てくれた仲間がいた。思うように作業がはかどらず悩んだ時、悩みを聞いてくれる仲間がいた。完成式前、狭い神輿小屋の中で多くの仲間が手伝ってくれている様子を見た

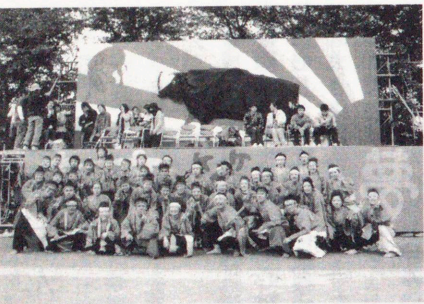
よき日々、思い出、仲間たち

体育祭委員長

3年 長壁 治弘

振り返れば、一年生の時に参加した体育祭が楽しくて、その時委員長だったケースさんのカッコいい姿に憧れて。そんなキッカケで残った「畜友会」。全ての始まりは「体育祭」だった。

二年生の時に部門が決まって、奈充子さんの下について作業をした約一ヶ月間。この時体験した事、良いところは生かし、反省すべきところは改善しよう！奈充子さんの作り上げた新しい体育祭を来年に繋げよう！そう意気込んだ去年の引退式。全ては「体育祭」のために。

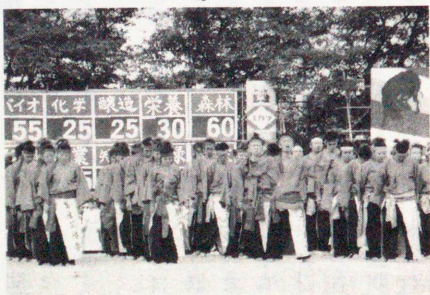


各部門の下の子が決まり、まとめ上手な瑞恵と素晴らしき発想をもった美和が入った。僕らの最初の作業は新入生歓迎会のステージに向けた踊りの作成、指導だった。目的は一年生をより多く勧誘するためであった。次に応援合戦についての会議が始まった。テーマは「闘牛」！資料を集め

時は思わず涙が出そうになった。みんなには感謝してもしきれない。みんな、本当にどうもありがとう。
制作期間47日。みんなの力で神輿は完成した。完成式は大変だった（笑）。今後、あれ程の量の酒を口にするのもないだろう。

神輿にとって、最大のイベントである厚木パレードも今年は晴天に恵まれ、大いに盛り上がった。泰平（岡 泰平）、奈須野（奈須野 光）と一緒に作り上げた神輿、今年から復活し、1君（増田 翔）、鶴澤（鶴澤 朋未）が作り上げた衣装。共に厚木パレードと言う最高の舞台で最高に魅せることができたのではないかと思う。

体育祭での順位は、残念ながら全16学科中第3位という成績だったが、今なら胸を張って言える。反省点はあったが、悔いはない。自分の中では畜産の神輿が1番だった。最後に、頼りない自分に最後までついてきてくれた1君、泰平、奈須野、鶴澤。君たちが一人でも欠けていたら、あれ程の作品はできませんでした。このメンバーで神輿を作れたことを幸せに思います。本当にありがとうございました。



解析し、踊りの流れを考え、踊っている側も観ている側も楽しめるストーリー性のある合戦を作った。その後早い段階から皆に教え始めた。本番までの道のりは楽しい事ばかりではなく、辛い事もあった。しかし、体育祭は統一内で唯一全部門の人達が参加する部門。皆も忙しい中参加してくれている、楽しんでもらわなくてわ。盛り上げていかなくてわ。そう気遣いながら進めていったシーズン中。

当日、ドタバタした中よく動いてくれた美和と瑞恵。本当に感謝している。結果は、総合4位・競技2位・応援合戦5位と惜しくも頂上には届かなかったが、僕らが力を入れていた合戦はオリジナリティ賞をいただいた。嬉しかった反面、悔しかった。でも、僕らが皆に感じてほしかったのは「結果」ではなく「体育祭」。楽しむをモットーに、安心した、悔しい、引退式での悲しい…全ての感情を感じてほしかった。皆、「体育祭」を感じてくれたのではないだろうか。と、僕はそう思っている。全ては「皆」のために。

今までを振り返ると、僕は沢山の仲間たちに囲まれ、最高の日々を過ごし、素敵な思い出を作った。ありがとう、畜友会。ありがとう、みんな。ありがとう、美和・瑞恵。

？みゆきちちゃん？

槽裝飾委員長

3年 曾田 由布子

平成18年11月6日、世田谷キャンパスで第115回体育祭が行われました。私の担当はその体育祭での応援席の裝飾でした。応援席は横幅約9m高さ約5m50cmとても大きな作品です。その大きな作品と一緒に考えて作ってくれたのは二年生のしようこ選手とゆうき選手でした。作業を開始したのは夏休みの終わり頃で、二人とも優しく頼りになって面白くてとても楽しかったです。でも本当は引っ張っていかねばいけなかったのに二人には頼りない委員長で本当に申し訳ないです。

今回の応援席のテーマは闘牛でした。闘牛を立体にするのは決まっていたのですが、前から立体を動かしたらいんじゃないかという声があり、とても悩みました。今までも大きな作品なので安全上の制限があり、なかなか実現にはいたりませんでした。しかし、担当の先生をはじめみんなとの相談の結果今年こそ動かしてやるッ！と決意しました。ところが、現実はそのなにごく困難の連続でした。制限上での構造の壁にはぶつかると、せつかく作っても世田谷で組み立てるまでは成功するかも判りません。しかも体育祭では畜産学科の作品となるのでプレッシャーに負けそうになり逃亡してやると思ったこともありました。

畜統、永久にともに

裝飾委員長

3年 村松 剛

第7回収穫祭および第115回体育祭：振り返ってみれば実に短かったように感じる。本格的に活動を始めた9月から11月7日までの約2ヶ月間、この2ヶ月間は一生忘れない。

裝飾部門は僕と2年生の宮本明歩の2人だけだった。今年の研究棟アトは枚数を1枚増やしての3枚。その3枚の絵画を約1ヶ月前から1週間ごとに1枚掲げていこうという計画。その間に来場者が通る全体アーチの作製も並行しなくてはならない。今年の全体アーチは夏から厚木3学科の裝飾部門で花を育て、「収穫祭」の文字を作るという壮大なものだった。果たして2ヶ月という短い期間でこれだけのことをすべてやれるのだろうか…。

「無理だろう、できるわけがない」
でもそんな時僕の思惑を察知したのか、明歩はこう言った。

「やりましようよ、できますって！」
この一言で僕がどれだけ救われたかを彼女は知らないと思う。この言葉でやろうと決心できたのだ。僕はこの後輩を助けたことを幸せに思う。

しかし、作業は思うように進まなかった。人生予定通り

それでも最後まで作って動かすことができたのはみんなの助けがあったからです。応援席は数人で作れるものではなく、単管をくみだてて床を張ってパネルを打って：本当に大工さんみたいな作業ばかりで、そのたびに三年生から一年生までみんなに手伝ってもらいました。危ないしきついしみんなも作業あるのに手伝ってくれて本当に本当にありがたう。みんながいたから闘牛のみゆきちちゃんが動きました。

最後に、ずっと支えてくれた三年のみんな本当にありがたう。みんなといっしょに作業ができてゆうこは幸せです。しようこ選手とゆうき選手、今回は悔しい思いをさせて本当にごめんさい。二人の作品ならきつと審査員は満点をくれるよ☆体育祭の皆様、力になれなくてごめんね。まささんとあっこさん、裏ですつとはげましてくれて本当にありがたうございました。

というようにはなかなか行かないものだ。2人で一緒に作業できる時間は授業の関係上ほとんどなく、片方が授業で片方が作業という時間が多くなってしまった。買出しに行くにしても一緒に行けば作業をする人間が居なくなってしまう。そうしたら手伝いに来てくれる1年生にも申し訳が立たない。2人しかないのだからしょうがない、この条件の中でやるしかないのだから。授業が終わってから一緒に作業を行うので、どうしても毎日夜明けまで行うことになってしまった。



こういつた点でも明歩には非常に迷惑をかけた。文句1つ言わずに最後までついてきてくれた彼女はやはりすごいと思う。僕がこの期間中、気分よく作業をできたのは一重に彼女のおかげだろう。さらに言うなら周りの人間にも恵まれた。僕ら2人を心配してくれ、自分たちの仕事を終えて休みたいのにもかわからず遅くまで手伝ってくれた他部門のみんなには感謝しつくせない。本当にありがたう！
こうしたみんなの

家畜苑委員長として

家畜苑委員長

3年 河合 大典

『自分、委員長やりたいッス。』楽天家の私は、その責任も考えずただ委員長法被がカッコイイというだけで先代、坂口陽祐さんに言っていた。そして私は家畜苑委員長になった。

私は家畜苑委員長としてどうだっただろうか。家畜苑会議のはずが、いつの間にか防災の丘でザリガニ釣りをしていた。勉強会のはずが、図書室の面白い本探しになっていた。作業の合間にやったバトミントンや虫取りに夢中になり、一日のほとんどを費やしたりもした。そんな日々を過ごす内、各研究室や富士農場、業者等への依頼も遅れてしまい、多くの先生方やメンバー達に迷惑をかけてしまった。どうやら私は委員長として不十分だったようだ。

こんな委員長だったが、第七回収穫祭家畜苑は大成功であった。委員長が遊んでいた分、メンバー達が頑張ってくれたのだ。収穫祭当日、子供達が説明文を読んでくれるようにと用意したスタンプ&クイズラリーには長蛇の列、リヤマや牛に触れその初めての感触に感動する人々、また大人にも楽しんでもらえるようにと用意した文展ボードにも興味深く読んで頂いた。そして何より、家畜苑の準備期間中はいつもメンバーの笑い声と笑顔に溢れていた。

協力もあつたので、作業は順調に進み、予定通りにすべてのことを終えることができた（厳密に言えば作業時間の延長などで狂った部分は多々あるが）。本当に仲の良かった3年生。文句は絶対にあつたと思うけど、こんな3年生に最後までついてきてくれた2年生。そんな2年生と来年すばらしいものを作り上げていくであろう1年生。畜産学科統一本部は本当に最高だ！

最後になりましたが、第七回収穫祭装飾部門を支えてくださったいました顧問の西脇先生、信岡先生、総務課の手島課長、学生サービスクの山口さんをはじめとする職員の皆様、並びに収穫祭実行本部、農友会各部の皆様がこの場を借りて御礼申し上げます。

今度は違う質問を自分につけてみる。今年の家畜苑はどうだったか。もちろん答えは最高だった!!だ。ヒデ、恭兵、ちょこ、みを、みちよ、チエル、トム、くぼとも、こんなテキトーな委員長についてきてくれてありがとう。そして楽しい時間をありがとう。

最後になりましたが第七回収穫祭家畜苑に御協力して下さいました先生方、各研究室の方々、富士農場の方々、元練習生、統一本部のみんな、そして家畜達。本当にありがとうございました。皆様の多大なる御協力に支えられ、第七回収穫祭家畜苑を無事に終わることができましたこと、深く御礼申し上げます。



編集後記

今年も、第43号目となる「ふじみの」を発行することができました。

バイオセラピー学科の増設に伴って建てられた新校舎、移転した売店横のラウンジは多くの学生が利用し、厚木キャンパスの新しい風景となっています。平成19年度以降も、学生数の増加と共に厚木キャンパスがますます活気にあふれていくことを期待しています。

この「ふじみの第43号」が、今後の畜産学科の更なる発展を担うものになれば幸いです。

最後になりましたが、この一冊を発行するにあたり、お忙しい中原稿を書いて下さった先生方、ならびに会員の方に深く御礼申し上げます。

編集委員長 谷口 絵梨



平成19年3月20日 発行
 神奈川県厚木市船子1737
 発行者 東京農業大学農学部畜産学科畜友会
 電話 046(270)6228
 “ふじみの”第43号
 神奈川県厚木市栄町1-15-15
 印刷所 有限会社藤野印刷所
 電話 046(221)3029

表紙写真撮影者：農学科3年 望月 希

